

ドン・ボスコのサレジオ家族 アイデンティティー憲章

CARTA D'IDENTITÀ CARISMATICA

della Famiglia Salesiana



ドン・ボスコのサレジオ家族
アイデンティティー憲章

CARTA D'IDENTITÀ ARISMATICA
della Famiglia Salesiana

日本語版の出版によせて

ここにご紹介する『ドン・ボスコのサレジオ家族 —アイデンティティー憲章』は、2012年1月31日、サレジオ会パスクアル・チャーベス総長によって発布されました。総長の言葉にもありますように、この『アイデンティティー憲章』は、先に出た『交わりの憲章』（1996年）と『使命憲章』（2000年）、それぞれの本質を取り入れ、まとめたものとして、私たちサレジオ家族の今後の歩みを導くものです。

私たちはさまざまなグループから成り、多様なものでありながら、一致させる絆をもっています。それは人間の思いによるものではなく、聖霊の賜物です。本書は、ドン・ボスコが聖母の仲介によって頂き、私たちが家族として受け継いでいるその恵み、カリスマを、さまざまな側面から表現しています。私たちはどのような家族であるのか、どのような共通の生き方に招かれているのかを謳っています。

ドン・ボスコ生誕200周年を準備するこの刷新の時に、個人で、また共同体、団体として、この本を手に取り、ぜひ深めていただきたいと思います。

カリスマ、そしてそこから生まれるアイデンティティーは、神さまからの贈りものです。それは、自分たちのものとして取っておくためではなく、教会をつくり上げるため、すべての人に奉仕する教会の使命にあずかるためのものです。神に感謝しつつ、この恵みを生きることは、社会の中で神さまの愛に応える私たちの道なのです。

ドン・ボスコが私たちの歩みを助け祝福してくださいますように。

私たちの母、扶助者聖マリアの取りなしを祈りつつ。

2012年9月8日

サレジオ会日本管区長 アルド・チプリアニ神父

目次

日本語版の出版によせて	3
目次	4
はじめに	7

第1章 教会の中のサレジオ家族

第1条 創立者のカリスマ的・霊的体験	11
第2条 発展する家族	12
第3条 家族の構成	14
第4条 一致と多様性	15
第5条 三位一体の神秘：交わりの源泉	15
第6条 教会の交わりの中で	17
第7条 新しいキリスト教的ヒューマニズムのために	18
第8条 貴重な女性の貢献	20
第9条 連帯の新しい形のために	21
第10条 賜物の交流	22
第11条 マリアのおられる家	23
第12条 ドン・ボスコに結ばれて	25
第13条 サレジオ家族とサレジオ会総長	26

第2章 サレジオ家族の使命

第14条 教会の中で、教会のための、カリスマによる使命	27
-----------------------------	----

第15条 使徒的な家族	28
第16条 「青少年、庶民、福音化されていない国民のもとに派遣されている」	29
第17条 福音に仕える	31
第18条 新たな宗教的・文化的環境の中で	33
第19条 使命における交わりと協働	36
第20条 各会の自立性と固有性	37
第21条 使徒職における共同責任	37

第3章 サレジオ家族の霊性

第22条 サレジオ家族の使徒的霊性の展望	41
第23条 父である神との協働	41
第24条 キリストの思いをもって生きる	42
第25条 聖霊に温順であること	44
第26条 教会の中の交わりと使命	45
第27条 日常の霊性	46
第28条 ドン・ボスコの「活動における観想」	47
第29条 ダイナミックな使徒的愛徳	48
第30条 統合の恵み	49
第31条 青少年への優先的な愛と、働く人々・庶民への献身	50
第32条 サレジオ的な慈愛（愛情）	51
第33条 希望のうちに楽観と喜びをもって	53
第34条 仕事と節制	54
第35条 創意工夫と柔軟性	55
第36条 サレジオの祈りの精神	56

第 37 条	扶助者聖マリア：使徒的靈性の師	57
--------	-----------------	----

第 4 章

サレジオ家族における交わりと使命のための養成

第 38 条	固有のアイデンティティーの認識	59
第 39 条	共同の養成	60
第 40 条	多様な働く場	61
第 41 条	協働の方法論	62
第 42 条	サレジオ家族の中の司祭の役割	63

第 5 章

サレジオ家族の構成、活性化

第 43 条	成長する家族	65
第 44 条	開かれた家族	66
第 45 条	拠りどころとなる中心	67
第 46 条	活性化を行う組織と会合の機会	68
第 47 条	祈り	70

はじめに

サレジオ家族の各会 代表者の皆様

兄弟姉妹の皆さん、

私たちはドン・ボスコの生誕 200 周年の祝いに向けて準備の 3 年間に入りました。この準備の 3 年間は、さまざまな形でサレジオ家族のすべての会とサレジオ運動全体が参加し関わるものです。2011 年 8 月 16 日から 2015 年 8 月 16 日まで続くこの準備と祝いの期間は、「恵みと刷新の時」です。ドン・ボスコのカリスマへの理解を深め、個人の生活および各会の生活にカリスマを浸透させるため、聖霊によってこの時が私たちに差し出されています。ここに皆さんにご紹介する私たち家族の「アイデンティティー憲章」も、この道を歩む私たちに触発し、導いてくれるでしょう。

1995 年 1 月 31 日、聖ヨハネ・ボスコの祝日に、ドン・ボスコの第 7 代後継者であるエジディオ・ヴィガノ神父は、ドン・ボスコのサレジオ家族の「交わりの憲章」を發布しました。ヴィガノ神父はその序文に、憲章が何を示すものであるかについて書いています。「……ドン・ボスコの類ない精神を作り上げることに寄与する基本的要素です。私たちは、家族の魂から出発することにしました。なぜなら、帰属意識は、……規定によるよりも……共有される精神の生き生きとした活力によって養われるからです。」この最初の憲章が差し出したサレジオの精神についての考察は、私たちが霊的な家族であること、したがって私たちの互いの絆の礎はその精神であると、理解するのを助けてくれます。

2000 年 11 月 25 日、私たちが尊者マンマ・マルゲリータの命日を記念する日に、ドン・ボスコの第 8 代後継者ファン・エドムンド・ベッキ神父はサレジオ家族の「使命憲章」を發布しました。ベッキ神父は

序文で使命憲章が「サレジオ家族に所属する会の使徒的使命に関する方向性と感性」を提供すると書いています。「これは、私たちに照らす光を与えてくれる文書だと言えるでしょう。本文書は、サレジオ家族に所属する会のメンバー一人ひとりに、サレジオ的特徴のある取り組みを呼びかけるものです」。この2つ目の文書は、私たちが使徒職の目的と意義をもって働く**使徒的な家族**であることを明確に打ち出しています。

2012年1月31日、聖ヨハネ・ボスコの祝日に、その生誕200周年準備の最初の年、ドン・ボスコの第9代後継者として、私は「ドン・ボスコのサレジオ家族—アイデンティティー憲章」を皆さんにお届けします。これは私たち皆にとり、家族として歩む旅路の、また各会の固有の歩みのための拠りどころとなります。その最初の草稿は2011年5月24日、扶助者聖マリアの祝日に出ました。私たちがカリスマにおいて成長できるよう、私たちの手にこの「^{たす}扶け」を置いてくださるのは、私たちに照らし支えてくださるマリアご自身です。「マリアはドン・ボスコのサレジオ家族を新たにしてください」と、総長としての最初の書簡でヴィガノ神父は書いています^{*1}。マリアは今日もそのみわざを続けておられ、私たちの精神を照らし、私たちが共有するカリスマの新たな発展に向けて心を開かせてくださいます。

アイデンティティー憲章は、私たち家族の交わりと使命をそれぞれ取り上げた前の2つの文書から出発し、年月をかけて熟してきた考察や体験を集約するものです。前の2つの文書の本質的な要素は、この新たな文書に採り入れられています。実際、この新しい憲章は、サレジオ家族の特徴と固有の要素を説明します。それは言い換えれば、サレジオ家族のすべての会が自分たちのものであると認識する特質ですが、それを描き出すことにより、体験の共有、協働を可能にし、家族として目に見える存在になります。

先の2つの憲章を採り入れ統合する、この第3の憲章に描き出されるのは、サレジオ家族のカリスマにおけるアイデンティティーです。言い換えれば、使命、精神、関係性、養成、教育法、福音宣教に関わるあらゆることです。確かに、その起源と発展においてとらえられるカリスマの歴史はアイデンティティーの一部となります。実際、記憶のないアイデンティティー、根のないアイデンティティーには未来がありません。そのため、本憲章はサレジオ家族の各会の体験を集約し、私たち皆が遺産として受け継いでいるサレジオのカリスマのアイデンティティーを、要約の形で描き出します。

本憲章にある私たち家族のサレジオ・カリスマのアイデンティティーの描写は、長い時間をかけた考察と合意形成の歩み、特にサレジオ家族の世界諮問委員会によってたどられたプロセスの結果です。共通のアイデンティティーについてのより高い意識と分かち合いの期待される実りは、一致、帰属意識、家族としての意味が深まることです。実際、アイデンティティーが弱いとき、理想は一貫性を失い、結びつきは弱まり、使徒職の意義が見失われます。そのため、教会全体への贈りものとすべく、共通のアイデンティティーを再活性化し、強めるよう、すべての会をここに招きます。

サレジオ家族を信じるならば、私たちは、サレジオ家族をアイデンティティーにおいて成長させるような熱意、内なる資源・手段、具体的な方法を見いだすことができるでしょう。そのとき私たちの家族は、新たな召命をひきつける生き生きとした活力を味わうでしょう。

私たちはこのことを、聖霊に、扶助者聖マリアに、ドン・ボスコに、そして私たち家族のすべての聖人と福者にゆだねます。

感謝をこめて。

2012年1月31日 聖ヨハネ・ボスコの祝日 ローマにて
ドン・ボスコの第9代後継者 パスクアル・チャーベス・V

*1 最高評議会報 289 「マリアはドン・ボスコのサレジオ家族を新たにされる」1978年3月25日、ローマ

第1章 教会の中のサレジオ家族

第1条 創立者のカリスマ的・靈的体験

私たちは謙虚な喜びあふれる感謝のうちに、ドン・ボスコが神の導きとマリアの母としての仲介により、独自の福音的生活の体験を教会のうちに興したことを認めます。

聖霊はドン・ボスコのうちに神への大きな愛、兄弟姉妹、特に小さな者と貧しい者への大きな愛に満たされた心を造り、ドン・ボスコを多くの若者の父、師とし、また大きく広がる靈的・使徒的家族の創立者としました。

ドン・ボスコは、教育者、福音宣教者としての活動において、良い羊飼いのうちに源と模範が見いだされる牧者の愛から、絶えずインスピレーションを汲みました。また牧者の愛は、ドン・ボスコの生き方、祈り、宣教の熱意を導くものでした。Da mihi animas cetera tolle をモットーとして選ぶことによって、ドン・ボスコは神と青少年への情熱を表現したいと望んだのでした。それは、9歳のときの夢で見た使命を果たすために、いかなる犠牲もいとわない情熱です。

同時代の青少年と社会のふつうの人々の必要に応えるため、ドン・ボスコは1841年に、少年たちを受け入れる大きな家族として、オラトリオを開設し、また聖フランシスコ・サレジオ会を設立しました。ドン・ボスコは聖フランシスコ・サレジオ会が、教皇を一致の中心とする教会の中で、生き生きと働くものとなることを望みました。

1864年のマリア・ドメニカ・マザレロとの出会いにより、ドン・ボスコは、教育の働きを少女たちのためにも広げるよう促しを受けました。そのためドン・ボスコは、マリア・ドメニカ・マザレロと共に、1872年、教育事業に捧げられた扶助者聖母会（サレジアン・シスター

ズFMA)を創立しました。**扶助者聖母会**は、ドン・ボスコの精神のうちに、同時にモルネーゼの聖女による女性としての精神の生き方をもって、教育事業に取り組みました。

ドン・ボスコはまた、**多くのカトリック信者**と出会い、接触を保ちました。その人々は、青少年のため、また社会の人々の信仰の擁護と強化のため、さまざまな形で献身する人たちでした。ドン・ボスコは、この人々と共に一致して働くことによって力と効果が生まれることを体験しました。このようにして、**サレジオ協力者会**(現在のサレジアニ・コオペラトリー)が誕生し、ヴァルドッコの精神に生かされて、青少年、社会の人々、宣教のための同じ使徒職を、家庭で、所属するキリスト者共同体で、社会の中で果たすことに献身しました。

ドン・ボスコは、この最初の3つの会の創立のために時間とエネルギーを注ぎ、養成と組織作りに献身しました。それぞれの活動の分野が異なることを認識しつつも、家族全体の使徒的な力が、目的・精神・教育の方法論とスタイルの一致にかかっていると、ドン・ボスコは常に確信していました。サレジオ会との、特にサレジオ会の長上である総長との扶助者聖母会とサレジアニ・コオペラトリーの法的結びつきが、この一致のしるし、保証となりました。

扶助者聖マリア信心会(現在の扶助者聖マリアの会ADMA)も、ドン・ボスコによって創設されました。聖体の崇敬と扶助者聖マリアへの信心を広めるためです。ドン・ボスコの周りには、最初の同窓生たちも集まりはじめました。

第2条 発展する家族

「カリスマを与えられた偉大な人」^{*2}として、また聖人として、ドン・

ボスコは教会において、修道・在俗の奉獻生活の会および使徒的信徒の会の創立者の中で、独自の地位を占めています。実際、私たちは驚嘆と感謝のうちに、最初の種が、生き生きと生い茂る木になるまで成長したことを認めます。

20世紀の間に、また新千年期の初めに、数多くの新たな会が、ドン・ボスコによって創立された最初の4つの会に加わりました。ドン・ボスコの霊的息子たちは世界のさまざまな国で、多様な社会・文化的環境の中で、新たな会にいのちを与えるインスピレーションと導きを、創立者から汲んだのです。それらの会は、時にはFMAとの協力のうちに、またサレジアニ・コオペラトリーやサレジオ会事業の友人たちの支えを得て、創立されました。

その多くは、サレジオ家族に所属する会であると、さまざまな理由に基づいて公式に認められています。それらの会は固有の召命を与えられていますが、ドン・ボスコを共通の「父」として認め、ドン・ボスコの精神に生かされていると感じ、それぞれの特徴にしたがってその精神を生きています。また、青少年、貧しい人、苦しむ人、まだ福音を告げられていない人に仕えるという共通の使命にあずかっています。

この大きな家族の一員となる可能性に向けて歩んでいる会がほかにもあり、このことは教会の尽きることのない活力の意味深いしるしとなっています。

第2バチカン公会議の刷新が実施に移される中で、1つの霊的・使徒的家族に所属するという意識は、ますます大きくなっています。サレジオ会の活性化の役割は明確にされ、なくてはならない拠りどころとしてサレジオ会総長の存在が再確認され、会の間での交流が活かされ、より深い兄弟的交わりと、ますます確信をもって取り組まれる養成と宣教活動の分かち合いが実現するようになりました。

*2 サレジオ会 特別総会文書7

第3条 家族の構成

「家族」という言葉は、各会をつなぐ結びつきを、そのさまざまなあり方において説明します。その結びつきは、単なる親しさや友情ではなく、内的・カリスマ的・霊的な交わりの形を取った表現です。したがって、この言葉は、サレジオ家族へのさまざまなレベルでの所属について説明するのに役立ちます。この帰属は、各会の**特別な、固有の特質**を尊重しつつ、共有する精神から汲むものであり、その精神は、ドン・ボスコのカリスマによって触発される使命の土台となります。そのため賢明な識別の歩みが求められ、その結果として、サレジオ家族の一員としての正式な承認へと至ります。

したがって、所属には、いくつか異なる資格によるものがあります。第1のものは、サレジオ会、FMA、コオペラトリー、ADMA が享受する資格です。これらはドン・ボスコによって創設された最初の4つの会、ドン・ボスコの事業を直接継承するグループです。ほかのすべての会は、精神、活動分野、教育・使徒的活動の方法論に関してこの4つの会を拠りどころとする必要があります。

第2の資格は、ドン・ボスコの息子たちの創意に満ちた働きによって生まれた、修道会と在俗会の両方を含む数多くの奉獻生活の会、またカトリック信徒の会に与えられます。これらの会は、特別なカリスマ的・霊的な表現をもって、家族の共通の遺産に豊かさを加えます。

最後に第3のレベルは、**特定の資格**による人々から成ります。それは幅広いサレジオ運動に参加し、サレジオ家族のうちにその活性化の中核を見いだす人々です。この中に含まれるのは、ドン・ボスコの友、サレジオ青少年運動、さらにより一般的には、サレジオ・ボランティアの奉仕活動（VIS）、また幅広い**はんちゅう**の範疇の人々、教育者、カテキスタ、さまざまな分野で働く人々、賛同する政治家、協働者、他の宗教・文化の人々さえ含まれ、この人々は世界中で働いています。

家族の一員としての法的な資格は、各会の申請への回答となる、総長からの公式の承認の手紙をもって授与されます。

第4条 一致と多様性

ドン・ボスコのサレジオ家族は、公的に創立され承認されたさまざまな会を擁するカリスマ的・霊的な共同体であり、霊的および使徒的な絆によって結ばれています。

これらの共同体は、**多様性にさまざまなものがある**ことを認めます。男性、女性という性別、それぞれに異なる固有の召命、神の民への奉仕としてのさまざまな司牧奉仕、男子あるいは女子修道者としての生き方、奉獻された信徒の男性・女性、独身のあるいは夫婦のキリスト者、各グループそれぞれ独自の、またそれぞれの会則に定められた、サレジオ的生き方の計画、各グループが暮らし働く、実に多様な社会・文化・宗教・教会の環境などです。

一致が養われるのは：皆が教会の交わりのうちに三位一体の神秘に引き入れられる、共通の洗礼の奉獻によって；青少年と貧しい人々に奉仕し、新たなキリスト教的ヒューマニズムを促進するサレジオの使命への参加によって；世界規模の新たな市民感覚と連帯の意識によって；ドン・ボスコの精神を共に分かち合うことによって；サレジオ家族の中で霊的な賜物を分かち合うことによって；扶助者聖マリアと、自分たちの聖なる創立者あるいは父であるドン・ボスコに、共に結ばれることによって；ドン・ボスコの後継者である総長との特別な絆によって、です。

第5条 三位一体の神秘：交わりの源泉

ドン・ボスコの使徒的家族は、第1に何よりもカリスマにおける家族、すなわち、ある使命のために教会に与えられた聖霊の賜物です（1コリ

ント12・1、4-6参照)。実際に、その最も真実な、最も深く下ろされた根は、三位一体の神秘の中にあります。言葉を換えれば、父、子、聖霊を1つに結ぶあの無限の愛、すべての人間の家族の源泉、模範、目標である三位一体の神秘です。

三位一体の神秘を起源とするサレジオ家族のメンバーは、自分たちの生活における、交わりである神の首位性を認めます。これが、サレジオの霊性 mysticism の中心です^{*3}。

三位一体の神とのこの交わりは、各会の会憲文にふさわしく明文化されています。

父なる神を拠りどころとすることは、お互いを兄弟姉妹として迎えるようサレジオ家族の各メンバーや会を動機づけます。神に愛され、サレジオの使命の広大な畑で共に働くように神に呼ばれたからです。それは、あらゆる恐れ、躊躇、疑いを乗り越え、それぞれが差し出すことのできる、またすでに差し出しているものを感謝するようとの招きです。

御父の使徒イエスを拠りどころとすることは、特に小さな人、貧しい人、病気に人に遣わされたイエスの特徴のいずれかに注目し焦点を当てよう、各会を動機づけます。幼いイエス、少年イエス、ナザレのイエスの隠れた生活、従順で貧しい、貞潔なイエス、善いサマリア人として、子どもたちを祝福し、弟子たちや人々を周囲に集める善い羊飼い、いけにえとして捧げられ、十字架の上でいつくしみ深い愛を示されるキリスト、死者のうちから復活する人々の最初の実り・希望である復活の主(1コリント15:20)などです。サレジオ家族はこのようにして、それぞれの遣わされる対象となる人々のために、会によって異なる奉仕を提供しながら、主イエスのあらゆる姿勢や行動を生きようとします。

聖霊を拠りどころとすることは、サレジオ家族の実り豊かさに結びつきます。創立者ドン・ボスコを興し、霊的子孙を与えたのは聖霊だ

*3 エジディオ・ヴィガノ、閉会のあいさつ、*Atti del Convegno di studio sulla Animazione della Famiglia Salesiana*. Roma 1980, 56 参照

からです。このようにして、各会は、それぞれの創立者の働きを通して生まれてきましたが、その創立者たちは皆、家族の父、ドン・ボスコに結ばれています^{*4}。

したがって、カリスマの多様性と、キリスト者共同体にさまざまなグループが数多く増えることを評価し、教会の枠さえも越えて人々の良心のうちにおられる聖霊を認めるように^{*5}、そして知恵をもって、すべての善意の人との対話と協働の関係を築くよう、聖霊は皆を促しておられます。

第6条 教会の交わりの中で

神の霊は、「全体の利益のため」(1コリント12・7)に多様なカリスマを信徒に分配します。人類の救いという使命を教会が果たせるように、教会の営みの中に調和あるかたちでカリスマを注ぎます^{*6}。

聖霊は、実に多彩な奉獻された男女の会の起源です。これらの会は、教会の使命に効果的に貢献しながら、さまざまな賜物をもって教会を豊かにし、神の多様な知恵を示し、唯一の・聖なる・普遍的・使徒的な教会自身の特徴を目に見えるものにします^{*7}。

サレジオ家族は、キリスト者の男性・女性、奉獻された男性・女性から成ります。個々の人はその人自身のカリスマと精神をもって、教会の使命に仕えるために自分自身を差し出します。それは特に、大きく広がる若者の世界、労働者層の人々の暮らす地域で、貧しい人々のため、まだ福音を伝えられていない人々のためです(使徒的)。

サレジオ家族は、教会の中心・心において生き、サレジオの使命を遂行しながら、さまざまな賜物を反映させ、1つの霊的・使徒的家族の

*4 特別総会文書171参照

*5 現代世界憲章22e参照

*6 参照 教会憲章12b、信徒使徒職に関する教令3c

*7 修道生活の刷新・適応に関する教令1b

うちにそれぞれの固有の召命を一致させ、神の民への奉仕へと方向づけられたさまざまに異なる奉仕職の交わりを表します（普遍的）。

サレジオ家族は、地方教会の中であって、教会のメンバーの交わり、またペトロの後継者との交わりを促進し、そのようにして、ドン・ボスコから受け継いだ教皇への忠誠を生きます（一致）。サレジオ家族は、地方教会の使徒的活動に参加し、固有の貢献を果たします。特に青少年と社会の中で働く人々の福音化の領域において貢献し、一人ひとりの全人教育のため、ほかのグループや組織との理解・協働を促進します。召命のための導きを若者に差し出し、信仰教育を行い、教会の中で、そして社会のために使徒職に献身する道を示します。さまざまな会は、教育の使命を果たすために同窓生の助けをよく活かしています。同窓生の中には、異なる宗教や世界観をもつ人々もいます（普遍的）。

ドン・ボスコのサレジオ家族は、カリスマに由来する特徴的な霊性を発展させながら、キリスト者としての生き方の独自のモデルをもって、教会という体全体を豊かにします^{*8}（聖なる）。このことをあかしするのは、すでに聖人に列せられた、あるいは列福・列聖手続きの進んでいる、数多くのドン・ボスコの霊的な息子、娘たちです。

第7条 新しいキリスト教的ヒューマニズムのために

ドン・ボスコの使徒的家族がサレジオ家族と呼ばれるのは、聖フランシスコ・サレジオに結ばれているためです。ドン・ボスコは聖フランシスコ・サレジオを自らの導き手、保護者として選びました。ドン・ボスコは、聖フランシスコ・サレジオの生き方や著作と共に自分自身の深い望みに合致していたそのキリスト教的ヒューマニズムと愛徳の表現を、模範として示しました。

それは、人間の弱さを無視することのない、同時に一人ひとりの人間が本来もつ善良さへのゆるぎない信頼に基づくヒューマニズムです。一人ひとりには神に愛され、置かれたあらゆる状況・身分においてキリスト者としての完徳に招かれていると考えるものです。

このヒューマニズムは、ドン・ボスコの創立した会のカリスマ的・霊的体験を構成する要素であり、今日1つの家族に集められたほかの会も、尊い遺産としてこれを自分たちのものとしています。

したがって、サレジオ家族全体はこの大きな運動に参加し、教育の分野、そして使徒的事業において独自の貢献を教会に提供します。

ドン・ボスコにとって「サレジオの」ヒューマニズムは、一人ひとりの人間・被造物・歴史的出来事のあらゆる肯定的な事柄に、ふさわしい価値を認めることを意味しました。このことによってドン・ボスコは、この世に存在する真に価値あるものを、特にそれが青少年にとって好ましいものであるとき、受け入れるように導かれました。同時代の文化の流れと人間社会の発展の中に身を置き、良いものを奨励し、悪を嘆くことなく、賢明に多くの人々の協力を求めました。発見し認められ、よく活かすべき賜物が一人ひとりのうちにあると確信し、若い人の成長を支え、誠実な市民、善いキリスト者となるよう励ます教育の力を信じ、そして、いつでも、どこでも、神の摂理に自らをゆだねるよう導かれました。それは父として見なされ、愛される神です。

ドン・ボスコは、家族を作り上げる各会の創立、そして宣教地への派遣など、そのほかの使徒的取り組みによって、19世紀に進行した世俗化のただ中に回復される、あるいはまだ福音化されていない場所に建設される、「キリスト教的価値に根ざした社会」という計画の達成のために、自らの貢献を果たそうとしたのです。

サレジオ家族の各会は、ドン・ボスコへの創意豊かな忠実のうちに、教会と諸宗教・現代社会との関係に関して、第2バチカン公会議の促進する新しい指針とその後の教会の公式の教えに従いながら、今日の

*8 特別総会文書 159 参照

社会に自分たちの奉仕を差し出すために献身します。それは、諸宗教間の対話^{*9}、人間と家庭の尊厳の擁護、正義と平和の促進^{*10}、特に多文化的な状況における諸文化間の対話、被造物（自然・環境）の保護などを中心とした奉仕です。

第8条 貴重な女性の貢献

最初に創立された会、またその後、創立された会のサレジオ的体験は、女性たちの意味深い、効果的な貢献から生まれ、豊かにされました。

ドン・ボスコがマンマ・マルゲリータから多大な影響を受けて、予防教育法を作り上げ、ヴァルドッコに顕著に見られる家庭的雰囲気を生み出したことは周知のことです。

また、マリア・ドメニカ・マザレロも忘れることができません。マードレ・マザレロは、ドン・ボスコの体験を女性らしく表現しました。そして霊的生活と教育的・使徒的生活の両方においてこれに具体的な、独自の顔を与えることができ、それはサレジアン・シスターズの真の遺産となっています。

フィリッポ・リナルディ神父の指導を受けた最初のVDB（ドン・ボスコ女子在俗会）は、サレジオ家族に女性の在俗奉獻生活をもたらしました。メンバーは貞潔・清貧・従順の誓願の霊的絆によって互いに結ばれ、家庭や日常の仕事の場で、共有のサレジオの使命を果たしています。

サレジオ家族の中の、20世紀に生まれた新たな奉獻生活の会のほとんどすべての始まりには、キリスト者の小さなグループが見られます。それは一般に貧しい状況の中、すでにさまざまな形で使徒的な事業に献身し、奉獻生活という理想を育み、司教あるいはサレジオ会司祭の指導を受け、新たな創立にいのちを与え、発展させています。

*9 参照 教会憲章 16、キリスト教以外の諸宗教に対する教会の態度についての宣言 2-5

*10 現代世界憲章 77-93

20世紀の最後の数十年に、女性の正当な位置づけについて、世界各地で考察が行われ、サレジオ家族の各会、特に修道会、女子在俗会、サレジオの信徒の会は、ヨハネ・パウロ2世によるさまざまな側面において革新的な教えの指針に従いながら、世界における女性の感性による貢献を、ふさわしく評価するようになりました^{*11}。

第9条 連帯の新しい形のために

現在のグローバル化の現象は、経済、文化、政治、宗教の領域で、個人・国民の間の相互依存を高めています。活かすことのできる機会も明らかに見られますが、同時にそれが新たな貧しさの原因となり、疎外を助長するような支配の形になってしまう危険も見られます。しかし、グローバル化についてもう1つの考え方があります。福音的価値に触発され、導かれる連帯の考え方です。

「ゆえにこの態度は、至るところに存在する無数の人々の不幸、災いに対するあいまいな同情の念でもなければ、浅薄な形ばかりの悲痛の思いでもありません。むしろそれは、確固とした決意であり、共通善に向かって、すなわちわたしたちは、すべての人々に対して重い責任を負うがゆえに、個々の人間の善に向かい、人類全体の善に向かって自らをかけて、共通善のために働くべきであるとする堅固な決断なのです。」^{*12}

サレジオ家族の各会は、さまざまな教育的・使徒的活動を通して、この**連帯**の実践に取り組んでいます。

1. **教育**。アシステンツァが提示する規準にのっとって理解され、実践されるとき、連帯の最も高度な形となります。今日、それは、「**寄り添うことの倫理**」という言葉で説明できます。言葉を換えれば、一人ひとりの人間の状況に関わること、友情と信頼の関係、青少

*11 参照 使徒的書簡『女性の尊厳と使命』20、21、28-31；使徒的勧告『奉獻生活』57-58

*12 使徒的回勅『真の開発とは』38

年と貧しい人々の最も深い望みに耳を傾けること、可能で効果的な応答を見いだすこと、忠実に共に歩むことです。

2. **ボランティア活動**（社会におけるボランティア活動、海外宣教地ボランティア）。今日、ボランティア活動は若者や大人の間大きく広まり、ある人たちにとっては自分の時間とエネルギーを差し出す心構えを求められる、本物の召命になっています。奉仕活動によって人々の具体的な問題と出会い、開発のための取り組みを支援し、共同責任の感覚をもつように招かれ、人に与え、奉仕することを学ぶように促されます。
3. **社会的、政治的な取り組み**。教会教導職の打ち出す規準に従い、特に信徒の会によって遂行されます。現代世界憲章に次のようがあります。「人々に対する奉仕として、国家の福祉のために尽くし、またこの任務の重責を引き受ける人々の働きを教会は賞賛に値するものとして高く評価する。」^{*13} また『信徒の召命と使命』には次のようがあります。「信徒は『公共生活』への参加を放棄することは絶対にできません。公共生活とは、組織的にまた制度的に共通善を促進することを目的としている経済、社会、法律、行政、文化上の多様な分野を意味しています。」^{*14}

第10条 賜物の交流

同じサレジオのカリスマと精神を受け継ぐものとして、各会は互いの間に親しい関係を築きます。各会は、常にほかのメンバーとの結びつきのうちにサレジオ家族の一員としてのアイデンティティーを表明します。

実際、固有の召命によってある会に入会するということは、その会の属する家族に入ることを意味します。それはあたかも、相互的な関係の

*13 現代世界憲章 75

*14 使徒的勧告『信徒の召命と使命』42b

うちに、各々がほかのメンバーにゆだねられていると感じるかのようです。

そのとき家族は、さまざまな会のおかげで、賜物と価値の完成を生きることができます。なぜなら、共通の遺産であり、そのためどのサレジオの心にも欠けることのない霊的特質のうち、それぞれ会によって特定のものが強められているのを見るからです。家族の交わりは、それらを皆のものとしします。

このすべては使命のためです。なぜなら、それによってより適切で効果的な方法で、青少年、貧しい人々、病気の人々、まだ福音を告げられていない人々の人間的向上とキリスト教的教育に取り組むことが可能になるからです。

本物の交わりがなければ、ドン・ボスコの計画はしだいに貧しいものになってゆき、不忠実にさえ陥る危険があることを、比較的短いサレジオ家族の歴史は示してくれます。ほかのサレジオ家族がいなければ、ある会のメンバーは自分自身になれないという認識をすべての人が培わなければなりません。その認識によって、ふさわしい表現や具体的な姿勢が生まれてきます。

第11条 マリアのおられる家

ドン・ボスコにとってマリアは、子どもころから自分の先生、母でした。9歳のときに見た夢の中の人が、そのようにマリアを指し示したからです。

ドン・ボスコはその地方の教会の慣習に従い、最初に取り組んだ教育事業を、なぐさめの聖母に捧げました。「貧しく、危険にさらされた」少年たちは、聖母の加護となぐさめを意識するようになりました。

後にドン・ボスコは、マリアに関する教義宣言の時を生きる普遍教会との交わりのうちに^{訳注}、愛することを教えられる方、人間として、キリスト者としての成長を力強く支えてくださる方として、無原罪の

マリアを少年たちに示しました。

そしてついにドン・ボスコは、自らの事業の創立と発展において、奇跡的な方法さえ用いて「マリアがすべてをなされた」ことに気づき、新しく生まれた修道会を、「キリスト者の扶け（扶助者）」という称号で呼ばれるおとめマリアに捧げました。

そして、扶助者聖母会の創立というインスピレーションをマリアから受けたドン・ボスコは、この会が、扶助者聖母への感謝の「生きた記念碑」であることを願いました^{*15}。またドン・ボスコは、使徒職において守られ、キリスト者の扶けのうちにインスピレーションを見いだすよう、サレジオニ・コオペラトリーをも扶助者聖マリアにゆだねました。また、すべての事業において母として共にいてくださる聖母への感謝のしるしとして、トリノの大聖堂に結ばれた扶助者聖マリア信心会（現扶助者聖マリアの会）を設立しました。

このようなマリアとの特別な結びつきは、20世紀の間に生まれたサレジオ家族のさまざまな会の、カリスマ的・靈的アイデンティティーに深いしるしを刻んでいます。教会によって公的に認められた名称にマリアの名を入れている会もあります。イエス・マリアの御心修道女会、無原罪の扶助者聖マリアのカテキスタ姉妹会、汚れなきマリアの御心侍女会、扶助者聖マリア宣教姉妹会、元后無原罪の聖マリア修道女会、扶助者聖マリア姉妹会などです。

サレジオ家族のすべての会はキリスト者の扶け聖マリアを崇敬しますが、中には、自らの使徒職の特定の側面を強調するために、ほかの称号によってマリアの存在を表現する会もあります。

マリアは教会の母、キリスト者の扶けとされるだけでなく、全人類

の母と見なされます。こうして、ほかの宗教をもつ人を含め、協働者、男性や女性、サレジオ家族のさまざまな会の人々が、聖母への心からの信心を培うことができます。

したがって正当に、サレジオ家族はマリアの家族である、とすることができます。

第12条 ドン・ボスコに結ばれて

ドン・ボスコは、使徒的靈性の真の学び舎を開きました。今日、聖靈の特別な促しに答え、さまざまな生き方の身分、多様な献身の形のうちにドン・ボスコの使命を共にするように呼ばれていると感じるすべての人にとり、ドン・ボスコは立ち帰ることのできる拠りどころです。

このことは、サレジオ家族に所属する各会は一致の中心であるドン・ボスコを囲んで集う、ということの意味します。実際、20世紀に生まれた各会の創立者たちは皆、ドン・ボスコの靈的息子たち、ドン・ボスコの修道会の会員です。彼らが絶えず心にかけていたのは、新しい環境において、そして自分たちの父であり師であるドン・ボスコの精神を注いだ新たな使徒的な力を結集して、広大な使命を遂行することでした。各会とそのメンバーを1つの家族に結ぶのは、ドン・ボスコとの靈的な絆です。その絆は、教会において特定のカリスマを与えられた人々を1つに結ぶ方、聖靈によるものです。

この絆による関係は、ドン・ボスコの牧者の愛のうちに表現を見いだします。使徒的情熱こそ、靈魂を探し求め、神だけに仕えるようドン・ボスコを駆り立てた靈的エネルギーでした。それは人の心、精神を満たす愛徳、大きく広がってドン・ボスコの事業に安定をもたらす計画を満たす愛徳です。そのため、ドン・ボスコはさまざまな人々を周囲に集めました。それぞれの役割、多様な賜物、またさまざまな身分や奉仕職を調整し、調和させました。

訳注 1854年12月8日、教皇ピオ九世は無原罪の聖マリアの教義を宣言。聖母マリアは原罪なくしてその母の胎に宿られた＝初めから原罪を免れているというこの教えの聖書的な根拠は天使ガブリエルの聖母へのあいさつの言葉などにあり、民衆の信心は古くからあった。

*15 FMA 会憲、第4条。参照 MB X, p.265（英語版。以下同じ）

ドン・ボスコは、絶えず神との関係に開かれた内的生活のうちに大きな力の源泉を見いだしました。私たちにとってもまた、教育的・使徒的な愛のために、内的生活の具体的な、要求の高い形が必要になります。

第13条 サレジオ家族とサレジオ会総長

ドン・ボスコの使徒的家族への所属の源泉は交わりにあり、交わりによって養われます。それは、聖霊に一致することです。聖霊は、サレジオ家族を一致へと導き、存在を与え、効果的な関係と活動における協働を確かなものにするために、具体的な形、公式な形さえ与えられます。

したがって、サレジオ家族の一員であるために、ドン・ボスコとの結びつき、共通の使命、同じ精神との結びつきを現実のものとする、なくてはならない中心が必要になります。

ドン・ボスコの思いにおけるこの中心は、サレジオ会総長です。皆が総長のうちに、一致のための3通りの奉仕職を認めます。ドン・ボスコの後継者、共通の父、家族全体の一致の中心です。所属を希望する会をサレジオ家族に迎えるには、定められた規範に従い、総長の公的な権限により、承認が与えられます。

このような使命を与えられているサレジオ会総長は、家族の各会におけるカリスマの実り豊かさを確かなものとするため、必要な指針を出す務めがあると感じます。模範と教えを通して一致を築き、個々の召命の多様性のうちに、同じ精神への忠実と、取り組みの連携調整を確保します。総長はこの奉仕を、ドン・ボスコ自身のものであった父性をもって果たします。それは、理解と慈愛、一人ひとりの成長への配慮、導きとカリスマにおける忠実、あらゆる表現におけるサレジオの召命の実り豊かさのための献身を求められる姿勢であり、ドン・ボスコが次のように書いたとおりです。「あなたの総長は、あなたたちと、あなたたちの永遠の救いの世話をします。」

第2章 サレジオ家族の使命

第14条 教会の中で、教会のための、カリスマによる使命

教会の使命は、御父の自由な主導からあふれ、イエス・キリストを通して、聖霊の働きによって永続するものとなります^{*16}。使命は1つであり、洗礼と堅信によって、神の民のすべての人に託されます。しかしながら、聖霊が特別なカリスマを与えるということは、派遣される対象となる人・グループにより、さまざまな形で使命が遂行されることを意味します^{*17}。

ドン・ボスコとドン・ボスコの霊的家族の使命は、使徒職へのキリスト者共通の召命の一部をなしています。しかし、それが霊的な賜物への応答であるため、その**起源はカリスマ的な**ものです。かつてドン・ボスコを青少年と労働者層の人々に遣わされたように、歴史の進展の中で、青少年、労働者層、宣教地のための使徒職を永続的なものとするため、ドン・ボスコの霊的息子・娘たちを遣わし続けておられるのは、御父の霊、復活された主の霊です。

この固有の使命は、中でも、時のしるしの**影響を受け、それに応えようとする**ものです^{*18}。私たちにとって、青少年、特に貧しい青少年、社会のふつうの人々、まだ福音を告げられていない人々のニーズや期待、望みや霊的な必要は、時代が変わり、社会的・文化的に異なる状況において、聖霊がサレジオ家族のさまざまな会を呼び、使命を果たすために遣わされるしるしです。教会において、教会のために遂

*16 参照 教会憲章2-4、教会の宣教活動に関する教令2-4、エキュメニズムに関する教令2

*17 参照 教会憲章9b、13ab、17、32、信徒使徒職に関する教令2a、教会の宣教活動に関する教令2a、5、6、10、35-37

*18 現代世界憲章11参照

行されるこの使命は、教会による承認、教会の指導と法に従うものです。カリスマによる使命が、さまざまなレベルで、教会活動の調和ある遂行の中に位置づけられるためです。

そのとき、カリスマによる使命はその**具体的な適用**を、サレジオ家族の各会の**固有の会則**のうちに見いだします。聖フランシスコ・サレジオ修道会、扶助者聖母会（サレジアン・シスターズ）、およびほかの修道会においては、遣わし任務を与えるのは、会憲によって定められたそれぞれの長上です。場合によって、**合議的な集い**が、遣わし任務を与える主体になることもあります。これは例えば、総会による最高評議員の選挙などです。

VDBなどの在俗会、またサレジアニ・コオペラトリーや Damas Salesianas（サレジオ婦人会）、そのほかのサレジオの信徒の会の場合、**遣わす権威**を有するメンバーはいません。しかし、個人は、会則に定められた使命に関する規定に忠実に従う責任があります。それぞれの会則は、社会におけるサレジオの使徒職の具体的な実施について、固有の法に基づき、述べるものです。

第15条 使徒的な家族

サレジオ家族は**使徒的な家族**です。サレジオ家族を構成する各会は皆、さまざまな度合い、さまざまな形で、共有する使命に奉仕する責任ある主体です^{*19}。

ドン・ボスコは、その創立にあたり、聖フランシスコ・サレジオ修道会と扶助者聖母会を観想会ではなく、「使徒的」な会として作り上げました。ドン・ボスコの霊的息子らである創立者たちの意向にしたがい、今日、サレジオ家族に所属するほかのすべての修道会は、明らかな使

徒的方向性を持ち、「使徒的」と認められる諸修道会の中に位置づけられています。いくつかの会は、多様な状況や文化の中で、すべての人に ad gentes 福音を告げる働きの一翼を担うという目的をもって、いわゆる「宣教」地で誕生しました。次の会はその範疇に入ります。イエスのカリタス会、汚れなきマリアの御心侍女会、扶助者聖マリア宣教修道女会、無原罪の扶助者聖マリア・カテキスタ姉妹会、元后無原罪の聖マリア修道女会、主の宣教姉妹会、扶助者聖マリア宣教姉妹会。

サレジアニ・コオペラトリー、Damas Salesianas（サレジオ婦人会）、復活の主のあかし人、Comunidade Canção Nova（新しい歌共同体）は、使徒的な信徒の会であり、ドン・ボスコとそれぞれの創立者の使命を、幅広く、在俗の形で実践するという目的をもって創立されています。

VDB、元后無原罪の聖マリア会、Volontari Con Don Bosco（CDB ドン・ボスコ男子在俗会）、弟子の会はいずれも、使徒的な目的をもつ在俗会です。メンバーは、家庭、職業の世界、社会的な関わり、市民としての務めの中で在俗的なサレジオの使徒職を果たします。

特定の会に所属する一人ひとりのメンバーは、それぞれの固有の召命によって遣わされています。したがって、それぞれにゆだねられた役割、恵まれている能力や可能性に従って、共有する使命を果たすよう呼ばれています。

サレジオ会、扶助者聖母会、そのほかの修道会においては、それぞれの会憲に基づき、使命はまず共同体—管区および支部共同体—によって取り上げられ、遂行されます。したがって、共同体は使命の第1の主体です。

第16条 「青少年、庶民、福音化されていない国民のもとに派遣されている」

サレジオ家族の使命は、教育の主体であるとともに受益者である青

*19 特別総会文書163

少年と大人を対象とし、それぞれの社会・文化・宗教・教会的状況にあって、また「宣教地」への特別な配慮をもって遂行されます。このことを示すために、**青少年・庶民・福音化されていない国民のもとに遣わされている**、という言い方が現在、用いられるようになってきました。この3つの次元は、互いに補い合うものです。

1. **若者に遣わされている。**ドン・ボスコの明確な意向によれば、彼が創立したサレジオ家族の会が奉仕する、優先的な対象者は、見捨てられ危険にさらされている貧しい青少年、あるいは現代的に言えば、経済的貧困、愛情の貧しさ、文化的、霊的な貧しさのために最も困窮する男女の青少年です。この選びはほかの会も明確な形で共有し、それぞれの会憲にも明記されています。各会は、若者の世界の中で、使徒的召命、信徒の召命、奉獻生活、司祭職への召命のしるしに見られる若者に特に配慮します。

優先的に思春期の子どもと青少年男子に関心を向ける会もあります。あらゆる成長段階における青少年女子を優先的に対象とする会もあります。さらに、区別を設けずにすべての青少年のために働く会もあります。深刻な疎外・搾取・暴力の犠牲者である男子・女子の青少年に特別に奉仕する会も多くあります。

2. **庶民・社会のふつうの人々に遣わされている。**天の照らしを受け、ドン・ボスコは大人にも目を向けました。優先的に、素朴な貧しい人々、労働者、都会の一般庶民、移民、疎外された人々に注意を向けました。ひと言で言えば、物的・霊的な助けを最も必要とするすべての人です。ドン・ボスコの指針に忠実に、サレジオ家族の各会はこの優先的選択を共有しています。扶助者聖マリアの会は新しい会則（2004）に、特に社会のふつうの人々に仕えるサレジオの使徒職に関わる条項を加えました。

人間的成長の始まる場である家庭に、特別に目を向けなければ

なりません。それは、人を愛し、いのちを受け入れることへと若者を準備させる場であり、人々の中の、また異なる国民・民族の間の連帯を学ぶ最初の学校です。サレジオ家族の皆が、家庭に尊厳が与えられ、健全な土台の上に立てられるために働きます。家庭がますます明らかな形で「家庭の教会」^{*20}となるためです。

その特別なカリスマによって、サレジオの使徒職を特殊な範疇の人々のために果たす会もあります。イエス・マリアの御心修道女会は、ハンセン氏病の人々に、イエスのカリタス会はお年寄りに、Damas Salesianas（サレジオ婦人会）は病気の人に奉仕します。

3. **福音化されていない国民のもとに遣わされている。**ドン・ボスコは福音宣教の理想を培い、当時の教会の宣教事業に具体的な形で参加しました。彼は、サレジオ会と扶助者聖母会が「宣教地」のために働くことを望みました。こうして2つの修道会はその始まりのときから宣教師を派遣し、驚くべき発展によって世界のすべての大陸に広がりました。サレジアニ・コオペラトリーも、その創立当初から宣教への協力を不可欠な特質としていました。扶助者聖マリア宣教師姉妹会と無原罪の扶助者聖マリアのカテキスタ姉妹会も、宣教事業に優先的に献身します。サレジオの使徒職のこの形は明らかに、VDB、イエス・マリアの御心修道女会、サレジオ御心奉獻者会、イエスのカリタス会、復活の主のあかし人、Damas Salesianas、主の弟子の会などの会の使命に含まれています。

第17条 福音に仕える

神の御子は、「いのちを愛される」父のみ顔を現すために、そして人々、特に助けと希望を最も必要とする人々の物的・霊的「幸福」に仕える

*20 教会憲章 11b

ために受肉されました。「人の子が来たのも、仕えられるためではなく、仕えるためであり、また多くの人の贖いとして、自分の命を与えるためである」(マルコ 10・45)。

ナザレのイエスが教えられた模範に倣い、教会は、また教会の中のサレジオ家族は、福音を告げ知らせ、すべての人を満ち満ちたいのちへと招くために、人類に仕えます。

公会議後の教導職の指針^{*21}によれば、その奉仕には次のことが含まれます。社会事業やさまざまな教育活動を通しての**人類社会の刷新**；キリスト者としての個人また共同体の**あかし**；宗教教育や要理教育を通して**福音を直接的に告げる**こと；諸宗教対話（特に生活と祈りを共にすること）、他の宗教の人と協力して不正と闘うこと、教会の一員になる決心をした人に同伴することなどを通しての**宣教の働き**；**祈りの活性化**。特にキリスト者共同体の**典礼**；**人間として、キリスト者としての連帯**の多くの取り組み；**宣教における協力**のさまざまな形；宗教への無関心や無神論の強い地域における**福音宣教する存在**などです。

「よいキリスト者、誠実な市民」を育成するという目標を、ドン・ボスコは人間として、キリスト者として満ち満ちた生き方をするために**青少年が必要とするすべてを示すために、最もよく言い表していました**。必要とするものとは、衣服、食べ物、住まい、勉強、余暇、喜び、友情、生きた信仰、神の恵み、聖性の道、参加、ダイナミズム、社会と教会の中の一人ひとりの場所などです。ドン・ボスコはその教育的体験を通して、ある計画、**取り組みのスタイル**を作り上げ、自らそれを**予防教育法**のうちにまとめました。「全面的に道理、信仰、慈愛(愛情)に基づくもの」^{*22}です。

サレジオ家族の各会は、ドン・ボスコの直観と体験を再び取り上

げ、公会議によって新たにされた教会論および福音宣教に関する教皇の教えに照らし、これを再解釈し、多様な表現で説明しながら、教育者、福音宣教者として働きます。予防教育法に従って実践される「教育・司牧奉仕」、「福音化することによって教育し、教育することによって福音化する」、「予防教育法のスタイルで実践される全人教育」、「愛情に基づいた教育」によって教育し、福音化する、など、さまざまな同様の表現があります。

基本的に、サレジオ家族が多様な形で福音的奉仕を実践する3つの領域があります。人間の向上、教育、福音宣教です。

すべての会にとり、福音を告げあかしすることとして理解される福音宣教は、それぞれの使命の優先目標です。

第18条 新たな宗教的・文化的環境の中で

サレジオ家族は、そのすべての構成員の刷新と交わりの歩みにおいて、新たな文化的状況における宣教の取り組みに関わる、ある根本的な選択をするに至っています。ますます急速に変化してゆくメンタリティーや習慣、人の移動の加速、同じ地域にさまざまな宗教・文化の人々が暮らすといった特徴をもつ、新たな文化的状況です。

1. **サレジオのヒューマニズムの促進**。一人ひとりの人間を中心に置きます。一人ひとりの尊厳を、そのあらゆる表現において守り、促進しなければなりません。教育の視点からは、このことは青少年のあらゆる可能性を目覚めさせ、発揮させることです。考える力、情操の豊かさ、自由へと方向づけられ、恵みによって強められた意志の力です。

真に人間的なあらゆる価値に、それぞれにふさわしく重きを置きます。その中には、仕事と文化、友情の絆と社会的責任、芸術

*21 参照 バウロ6世回勅『福音宣教』、ヨハネ・バウロ2世回勅『救い主の使命』

*22 G. BOSCO, Il sistema preventivo nella educazione della gioventù, in PIETRO BRAIDO (ed.), Don Bosco Educatore, scritti e testimonianze, LAS, Roma³1997, p.248ss

的才能、専門的能力と学問的功績、私生活・公生活における道義的な誠実さ、生活に味わいをもたらす日常のささやかなこと、これらの価値を皆が守り、促進しなければなりません。

さらに、サレジオのヒューマニズムは日常の生活に意味を与え、一人ひとりと社会のために希望の理由と将来の展望を提供しようとしています。

最後に、サレジオのヒューマニズムは、社会および教会の中に自分にふさわしい場を見いだせるように一人ひとりを助け、すべての若者は自らの召命を発見できるように助けてもらう権利があると認めます。

2. **具体的な状況に取り組む。**世界各地で働くサレジオ家族のすべての会にとって、一人ひとりを大切にするために献身することは、社会・文化・宗教の観点から多様で複雑な各地域の状況のため、容易な挑戦ではありません。生じてくるニーズに応える、可能で効果的な取り組みを見いだすために必要なのは、教皇と地方教会の司牧者の指針から常に汲みながら、その地域の状況を賢明に適切に理解する力量です。
3. **存在意義をもつように配慮する。**差し出すことのできるものを分かち合うあかしの価値、長い時間をかけて人々に直接耳を傾けることから生まれてくる具体的な取り組みの提案、共通の目標をもって未来のために真剣に協力して働くときに始まる互いに学び合うプロセスなどによって、存在意義をもつようになります。

そのとき人々は、次の困難に立ち向かい、可能な道を見いだします。人や組織に関して生じる問題；異なる立場や信条を尊重しながら、同時に道徳的価値を守り促進すること；過去の体験から出発し、未来にまなざしを向けながら見いださなければならない新たな解決策；最も弱く危険にさらされた人々の権利の擁護；政治の領域、特に教育政策の立案される場における効果的な存在；

人間的・福音的・サレジオ的な価値に養われる世論の促進。

多様な地理的・文化的状況において、サレジオ的存在の意義にさまざまな規範があるのは明らかです。あるところでは可能で適切なことが、ほかのところではそうでないかもしれません。ある人たちが特定の状況でできることが、ほかの人たちにとっては不可能かもしれません。同じ1つの使命に忠実であることは、同一の歩みを人々に押し付けるものではありません。

4. **広報の挑戦への取り組み。**ドン・ボスコは広報の有効性をはっきり認識し、個人・共同体の成長の手段として、同時に社会の人々の間で信仰を守り広める手段として、広報をよく活用する任務を霊的家族にゆだねました。

今日、情報技術の手段によって、かつては私的なことと考えられていた事柄が公にされるようになりました。それは瞬間的に広がっていく形で働き、多くの人に参加し、特に若者をひきつけ、人々の考え方、関係のあり方に変化を生じさせ、ライフ・スタイルの提案を広めます。それは、必ずしもキリスト教的価値観に基づくヒューマニズムに調和するとはかぎらないライフ・スタイルです。

一方、これらの手段は、教育と福音宣教のための新たな機会を提供します。実際、ネットワークや遠距離のコミュニケーションによって生まれる可能性のため、さまざまなことを行い、かつては想像もできなかったような方法で協同の働きを作り上げることができるようになっていきます。ドン・ボスコの使徒的家族は、革新的な創意工夫によってすでに取得している手段と合わせ、これらの未開拓の可能性をサレジオの使命のために活用し、社会の提供する機会をとらえようとするものです。

第19条 使命における交わりと協働

私たちの家族を一致させる絆は、「使命における交わり」^{*23}です。したがって、各会は、共通であると同時に多様な福音への奉仕を果たしながら、神から来る交わりの賜物を生きるように呼ばれています。奉仕は会によって、それぞれの対象者、固有の目的、さまざまなスタイルにしたがって、多様なものになります。

ドン・ボスコは、教育者、牧者、創立者としてのあらゆる活動において、一人ひとりの可能性や賜物を認識する非常に優れた能力を表しました。協働者の中で最も若い者にも責任を与え、使徒職において多種多様な技能を調和させ、各自の適性・能力・養成に合う仕事を一人ひとりのために見いだしました。教育・司牧の奉仕において、**協力して愛徳を発揮する必要性を**、ドン・ボスコは常に認識していました。聖霊が、全教会の益のためにカリスマを興されると確信していたのです。

使命における、また使命のための各会間の交わりは、教育と宣教への取り組みにおいてますます不可欠なものと考えられるようになっていきます。実際、活動を連携させ、信仰の生き方のさまざまなモデルを示し、司牧奉仕を補完し合うものにするのが緊急に必要であると認識されています。

このように、共に働くことによって、あかしをより効果のあるもの、告げられる福音をより納得のいくものとし、より生き生きとした使徒的愛徳を育み、交わりと使命における家族のアイデンティティーを考察し、表現しながら、各会の特質をよりよく評価できるようになります。

このため、各会の自立性を大切にしながら、協働のあり方を保ち、必要であれば可能な新たな方法を見いださなければなりません。

第20条 各会の自立性と固有性

使命における、使命のための交わりは、家族の各会の自立性と固有性を損なうことなく、むしろそれを明らかにし、強化します。

実際、各会は、霊性・養成・財政・統治における自立性を発揮するだけでなく、それぞれの組織や固有のやり方にしたがって使命を果たしながら、使徒職においても自立しています。

実に家族であるということは、画一的な活動を皆に強いることではありません。そのようにするなら、それぞれの違いをなくすことになり、使徒職に混乱と不確かさをもたらすでしょう。それはむしろ、皆が共有するプロジェクト全体の中で、各会の行っていることを調和させることです。

したがって、交わりにおける各会の**固有性**を認め、促進しなければなりません。若者たちには、各会が提供する固有の奉仕を受け、活かす権利があります。それはサレジオ家族にとって、また全教会にとって豊かさとなり、このようにして、青少年の善益のために働きますます多くの人々の力が結集されていきます。この自立性における交わりは使命における共同責任への招きですが、必ずしもあらゆる事業、あるいはすべての場所で共同責任の形を取らなければならないということではありません。

第21条 使徒職における共同責任

共同責任のために前提となるのは、各会が自らの成長、メンバーの養成、使徒的事業に自立的に取り組む力を確保し、できるかぎり効果的に固有の召命と使命を果たし、会の中に忠実さと創意工夫の実りである活力を確かなものとする事です。

そこで次のことが期待されます。①各会間のさまざまな形の協働。

*23 『信徒の召命と使命』32 参照

多様な部門や分野、さまざまな事業でサレジオの使命が果たされるように。②同じ地域に暮らし働く各会との協働。地方教会の司牧組織や民間の組織と連携しながら、愛の文明を共に築くことを目指し、サレジオの貢献を果たすためです。サレジオの貢献は、豊かさや内容の多様なものです。

共同の計画を遂行するには、自分の所属する会の特定のものの見方、あるいは将来の展望をあきらめることを意味する、歩み寄りのプロセスが、時には求められることは明らかです。

いずれにしても、共同責任によって、共同で目指す目的のために共同で取り組むことが求められます。すべての会は共に、福音の価値に基づいて、ドン・ボスコの使徒的家族のカリスマ的・霊的アイデンティティーの特質をもって、外へと向けて広がるように呼ばれています。それは家族全体の特質であり、したがって一部の会の関心にとどまることはありえません。個々の会員を含めて皆が一人ひとり、受け取った霊的遺産を活気づけ、促進することに責任をもっています。

各会が認識し、実現に努めなければならない目的は次のものです。

1. 現在の歴史的状況の中での**教育の問題**を共有する。生きることの基本的価値に基づいて少年・少女を教育する最良の方法を探求し、彼らが福音に出会うよう導く。
2. **予防教育法**を知らせる。予防教育法はドン・ボスコの教育の知恵の総合であり、後継者と全教会にドン・ボスコが残した預言的メッセージです。道理・信仰・愛情に基づく、霊的・教育的体験です。

道理は、キリスト教的ヒューマニズムの価値を明確に示します。意味の探求、仕事、勉学、友情、快活さ、信仰心、責任ある自由、人間としての健全な判断力とキリスト教的知恵の調和など。

信仰は、救いの恵みを受け入れること、神への望みを培い、主キリストとの出会いを育むことです。それによって、教会の生活

と使命の中に自らの場を見いだしながら、生きることの十全な意味が与えられ、幸福への渇きに答えが見いだされます。

愛情は、効果的な教育的関係を築くには青少年を愛するだけでなく、彼らが愛されているとわかるようにする必要があります。それは青少年の心にある、あらゆる潜在的な力を目覚めさせるような関わりと愛情であり、全面的自己贈与に至るほどの成長へと導きます。

今日、これまでもまして、道理、信仰、愛情は、教育事業において不可欠な要素になっています。新たな世代の期待に応えるため、より人間らしい社会を生み出すための、価値ある推進力になっています。

3. **サレジオの精神**を、一人ひとりのあかしと言葉によって広めること。サレジオのヒューマニズムは一人ひとりにかけるものであり、時に困難な状況であっても、これを広めるようすべての教育者に求めます。それは、新しい愛の文明の礎になります。
4. **サレジオ運動の促進**。ドン・ボスコは、教育・福音宣教の事業に参加するよう多くの人を招きました。少年たちと貧しい人々に、あらゆるレベルで関心が向けられるようにしました。大きな広がりをもつサレジオ運動と、その中で働くさまざまなグループ同士の連携は、皆の益となる貢献をしています。

第3章

サレジオ家族の霊性

第22条 サレジオ家族の使徒的霊性の展望

使徒的霊性は、サレジオ家族の使命における、また使命のための、交わりの生活を照らし活気づける中心です。実際、それは、人間の計画によるものではなく、またいかに完璧であっても組織化の働きによるものでも、人々を1つに集める優れた技術によるものでもなく、牧者の愛からあふれる交わりです。その牧者の愛は、聖霊によってドン・ボスコの心に呼び覚まされ、聖性の高みに至るほどドン・ボスコを触発しました。

霊性とは、私たちの生活が聖霊に導かれることです。聖霊は、1つの家族に属するさまざまな会にご自分のカリスマを与えられます。**使徒的**とは、献身と奉仕へと駆り立てる内的な力を意味します。それは教育と福音宣教の働きに救いをもたらす効力を与え、生活全体を、このインスピレーションを中心として統合します。

サレジオ家族のメンバーは、信仰、希望、愛に動かされ、一人ひとりにご自分のあわれみ深い愛を伝えるために絶えず働いておられる神のみわざにあずかります。そして教会の交わりと使徒職に全面的に参加するものであると感じます。

第23条 父である神との協働

神を自分の生活の統合の中心、兄弟的交わりの源泉、活動のためのインスピレーションとしてお迎えすることは、ある神のイメージを前提とします。自らの孤独と不動の沈黙の中に沈み、地上のことに関心のない、遠い神ではなく、人類に自らを全面的に与えてくださった愛

の神です(1ヨハネ4・16参照)。「今もなお働いておられる」(ヨハネ5・17)父、子どもたちの生活を共にし、具体的な形で、人々の期待に限りない愛をもって応えておられる神です。私たちの歴史に関わるあまり、ご自身を人間の自由にゆだねられる神、拒絶される危険を受け入れ、ゆるす愛(アガペ)として絶えずご自分を与えられる神です^{*24}。

この神は、沈黙のうちに、しかし効果的に歴史のうちに働かれながら、活発にたゆみなく働く協力者たちを招かれます。協力者たちは、生活の具体的な状況において、愛し、与え、仕えるための力を神から汲みながら、神の愛を告げ知らせ、良いわざを行うことにエネルギーのすべてを注ぎます。

サレジオ家族とそのメンバーにとり、「神の現存のうちに生きる」とは、神との強い、たゆみない絆を培うことを意味します。したがって、神の愛にかたどられた愛に満たされるのを感じます。自らを愛のうちに無私の心で与え、使命の特別な対象である人々のために報いを期待せず、尽くす愛です。また、私たちの時代の人々の期待や要請のうちに、神の神秘的な現存のしるしを見ることができ、それに応えることができることを意味します。

ドン・ボスコが心からの祈り《Da mihi animas, cetera tolle》を捧げたのは、この神、あわれみ深い父でした。ドン・ボスコは自分の弟子たち皆に繰り返し言います。「神聖なことがらのうちで最も神聖なことは、霊魂の救いにおいて神に協力することです。それは最も高い聖性への確かな道です。」

第24条 キリストの思いをもって生きる

ドン・ボスコは、聖体に現存されるイエスへの、また神なる救い主

への、確信に満ちた信心を自らの霊的生活と使徒的活動の中心に置きました。聖体に現存されるイエスをドン・ボスコはしばしば「この家のご主人」と呼び、神なる救い主の救いの働きに倣いたいと願いました。

洗礼によってキリストに接木された私たちは、キリストと1つになるために、聖霊の働きに温順に自らをゆだねます。聖パウロと共に次のように言うためです。「わたしにとって生きるということはキリストです」(フィリピ1・21)。「生きているのは、もはやわたしではなく、キリストこそわたしのうちに生きておられるのです」(ガラテヤ2・20)。同時に、使徒の次の勧めにも耳を傾けます。「キリスト・イエスが抱いておられたのと同じ思いを抱きなさい」(フィリピ2・5)。

その思いとは：あらゆることにおいて聖霊に導かれ、神に遣わされた者であるという目覚めた意識でいること；困難や反対に勇気をもって立ち向かいながら、ゆだねられた使命の遂行において父のみ旨に無条件に従順であること(ヨハネ5・17～)；あらゆるさまざまな死から人々を解放するために、たゆみなく、惜しみなく献身し、すべての人にいのちと喜びを伝えること；良い羊飼いの心で、小さな人々、貧しい人々に情熱的な配慮を注ぐこと；十字架上でいけにえとなるほどに、絶えずゆるす愛；エマオに向かう2人のためにそうされたように、弟子たちの旅の仲間となる約束。

私たちの活動のインスピレーションとなるのは、特に良い羊飼いのイメージです。それはサレジオの使徒的霊性の2つの大切な側面を示しています。

第1に、主の使徒は、自らの意識の中心に一人ひとりの人を置き、その人をありのまま愛します。偏見も例外もなく、まさに良い羊飼いが、道を外れた羊にもそうされるように。

第2に、使徒は自分を前面に出さず、いつも、主イエスだけを指し示します。あらゆる形の隷属から解放できる唯一の方、永遠のいのちの牧場へと導くことのできる唯一の方(ヨハネ10・1-15参照)、迷う者を決して

*24 ベネディクト16世、使徒的回勅『神は愛』10参照

見捨てず、その弱さをご自分のものとし、信頼と希望に満ちて探しに出かけ、見つけ出し、豊かないのちを生きるよう、連れて帰られる唯一の方です。

ドン・ボスコの息子、あるいは娘にとり、キリストに根ざし、キリストに似た者に変えられることは最も深い喜びです。このことから、次のことが生じます。み言葉への愛と教会の典礼に表れるキリストの神秘を生きる望み；キリスト者の自由、回心、分かち合いと奉仕の精神を教えてくれる、聖体とゆるしの秘跡に心をこめてあずかること；個人また共同体として、内的また社会的に、生きることとその意味について新たな理解に道を開く、主の復活の神秘への参与。

第25条 聖霊に温順であること

キリスト者の生活は本質的に、聖霊における生活です。第2バチカン公会議が促進した刷新の歩みを共にするサレジオ家族は、聖霊の真の賜物、その使徒的家族に活力を与えた霊性の源である、ドン・ボスコのカリスマにしたがって自らのアイデンティティを定め、復活の主の霊との絆を深めるよう努めてきました。

啓示されたみ言葉が語る聖霊という方の特質は、サレジオ家族のさまざまな会に属する人々の霊的・使徒的生活のために、特に光を与えてくれます。聖霊は創り主であり、いのちを与える方です。救いのみわざを歴史において継続するため、御父と復活された主によって遣わされます。信じる者を真理／キリストに導くのはこの方です。信じる者がキリストのうちに、キリストによって生きるために。この方は、真理の光に心を開かせ、愛の賜物を受ける準備を整えさせるために、人々の良心に語りかけます^{*25}。聖霊は、キリスト者共同体のうちに特に生き生きと働いておられ、交わりと奉仕において一致させ、信徒のう

ちに使命に仕える精神を注ぎます。聖霊は、福音宣教に献身する人々の先に立ち、支え、同伴される方です^{*26}。

サレジオ家族のメンバーが身につけるように呼ばれている聖霊への姿勢は：私たちがいつも聖霊の力に支えられている確かさのうちに、穏やかに信頼すること；聖霊のひそやかなインスピレーションに温順であること；個人・共同体における人間的な出来事のうちに、聖霊の現存を賢明な識別をもって認めること；人々の生活、教会、社会に神の国が到来するよう、聖霊の働きに賢明と勇気をもって協力すること；ドン・ボスコのカリスマに感謝し、ドン・ボスコの教育的・使徒的計画の実現のために惜しみなく働くこと。

第26条 教会の中の交わりと使命

ドン・ボスコは教会への大きな愛を抱き、教会共同体への帰属意識のうちに、それを表しました。同時に、青少年の教育のための特別なカリスマを受けていると意識していたドン・ボスコは、さまざまな文化的環境において教会を築き上げるために、そのカリスマを発展させました。

ドン・ボスコの家族の家宝の中には、ペトロの後継者への子としての忠実、また地方教会との交わりと協働という豊かな伝統があります。「教会と教皇に関することなら、どんな苦勞も取るに足りない。」^{*27}「教皇の望みは、私たちにとって命令です。」^{*28}

ドン・ボスコにおいて、教皇へのこの無条件の献身は教会への愛の表現でした。それは、受け継いだ遺産として、私たちが受け入れ、生きるものです。

実際、教会は、人類の歴史における復活されたキリストの目に見える

*26 教会の宣教活動に関する教令4

*27 MB V, p.383、会憲第13条

*28 MB V, p.380 参照

*25 参照 信徒使徒職に関する教令29c、現代世界憲章22e

現存です。信仰の一致における、また多様なカリスマと奉仕職における、兄弟姉妹の交わりです。福音を告げ知らせることによって神の愛を知らせよう私たちが駆り立てる愛です。神のご計画に則した世界を築くために人類に差し出される奉仕です。主キリストのうちに一致の中心を、またペトロの後継者のうちに一致への奉仕者を見る、1つの家族です。

ドン・ボスコから私たちが受け継いだ霊性は、際立って教会的なものです。教会の交わりを表現し、養い、キリスト者共同体のうちに兄弟的關係と積極的な協働のネットワークを作り上げます。それは、若い人、貧しい人が教会で安心していられ、また教会を築き上げ、その使命に参加することができるように彼らを助ける、教育的な霊性です。ドン・ボスコの数多くの息子、娘たちの聖性の賜物によって、全教会を豊かにする霊性です。

第27条 日常の霊性

ドン・ボスコは聖フランシスコ・サレジオからインスピレーションを汲みました。本質的なものに基づいているので単純素朴な、すべての人に開かれているので誰にとっても近づきやすい、人間的な価値に満ちているので魅力的な霊性の師として、したがって、教育事業に特別に適した模範として、聖フランシスコ・サレジオを認めました。ジュネーヴの聖なる司教は、その基本的作品（『神愛論』）の中で「忘我の状態 ecstasy」について語ります。この言葉は、特異な霊的現象を意味するというよりも、自分自身から出て行き、他者に向かうことを意味します。それは、神にひきつけられ、確信を与えられ、神の支配に明け渡し、神の神秘にますます深く分け入る人の体験です。

聖フランシスコ・サレジオにとっては、忘我の状態には3種類あります。

- ・**知的なもの**：これは、神がどのような方であるかを見て感嘆すること、また創造のみ業のうちに神がなさった大いなること、今もひきつづき一

人ひとりの人生において、そして人類の歴史においてなさっておられることに感嘆することです。それは、み言葉の黙想において用いるなら、よりはっきりと見えるようになるまなざしです。実際、神がごらんになるように物事を見られるように私たちの目を開かせるのは、み言葉です。

- ・**情操的なもの**：これは、私たちへの神の愛を体験することです。そして、その愛に応えたいという望みが大きくなります。その愛に養われる私たちは、神の栄光と神の国のために自分の能力やいのちを捧げられるようになります。絶えず目覚めていること、心の清め、祈りの実践がその前提になります。

- ・**活動と生活におけるもの**：これは聖フランシスコ・サレジオにとり、前の2つの上に頂点を飾るものです。知的忘我は空論に、情操的忘我は単なる感傷に終わる可能性があります。一方、活動の忘我は、神から来るもの以外ではありえない、寛大な無私の心を明らかにします。そしてそれは、さまざまな形で表れる愛徳のうちに、人々の善のために具体的、効果的に献身することへと変換されます。

サレジオ家族は、創立者ドン・ボスコの姿を考察し、聖フランシスコ・サレジオの霊性と霊的生活 mysticism の特質を、1つの簡潔な、挑戦を投げかける表現にしました。「日常の霊性」です。

第28条 ドン・ボスコの「活動における観想」

ドン・ボスコの霊的生活 mysticism は **Da mihi animas, cetera tolle** というモットーのうちにその表現を見だし、聖フランシスコ・サレジオの「活動の忘我」と同一に見なされるものです。それは、思い、気持ち、意志が神との一致のうちにある、日常的な活動の神秘です。兄弟姉妹の必要としていること、特に青少年の必要、そして使徒的な配慮が、祈りへの招きとなる一方、絶えず祈ることが、神と共に兄弟姉妹の善益のために惜しみなく、自己犠牲的に働く姿勢を養います。

これは、ドン・ボスコの内的生活をよく知っていた福者フィリッポ・リナルディが次のように説明した、「活動における観想」の霊的生活です。「ドン・ボスコは、外的活動を内的生活と最も高度に結び合わせました。疲れを知らない、全身全霊を打ち込む活動、大きな広がりを持ち、多くの責任を伴う活動と、神の現存の感覚をいしづえに、少しずつ、習慣的な、たゆむことのない持続的な、生き生きとした本質的なものになり、神との完全な一致に至る内的生活とを結び合わせました。このようにして、ドン・ボスコは、活動における観想、活動の忘我というあの完徳の状態に至りました。ドン・ボスコは、生涯の最後までその状態の中に取りました。歓喜のうちにある穏やかさ、靈魂の救いへの思いのうちに。」^{*29}

サレジオ家族は、ドン・ボスコが生き抜き、すべての霊的弟子たちに貴重な遺産として残してくれたこの霊的生活を取り上げ、生きています。

第29条 ダイナミックな使徒的愛徳

ダイナミックな使徒的愛徳は、ドン・ボスコの精神の中心、サレジオの生き方の本質、サレジオ家族のメンバーの使徒職の推進力です。「愛」は、神の名そのものです(1ヨハネ4・16参照)。それはただ単に人間の心がつ力を示すだけではなく、御父の先立つ愛、キリストの共感するあわれみの心、聖霊の言葉に尽くせない愛にあずかることです。主の弟子たちを見分ける特徴はこれです。すなわち、神が愛される同じ愛で互いに愛し合うことです。

使徒的：私たちが豊かないのちを受けられるようにイエスを遣わされる、御父の無限の愛にあずかること。すべての人の救いを願う、良い羊飼いの切なる望みにあずかること。人々の良心に、人々の人生において働かれる聖霊の、愛のあふれる流れに開かれることです。

ダイナミック：生き生きとした活動、新しいことを取り入れる力量を表します。すでに行われていることで満足しないこと、惰性に流されないこと、あらゆる生ぬるさや安楽を避け、むしろ、情熱と創意工夫をもって、青少年の世界と労働者層の人々の期待に具体的に応えるために、最も必要とされる効果的な方法を探求します。

以上のことは、ドン・ボスコがオラトリオの心と呼ぶものです。それは熱意、情熱、可能なあらゆる手段を駆使し、新たな道を探ること、試練に遭ってもくじげないこと、敗退しても再び立ち上がる意志、養われ、培われ、広く伝えられる前向きな心です。それは、自己贈与の輝かしい模範をマリアのうちに見いだす、あの信仰と愛に満ちた他者への配慮です。

乳幼児や子どもを対象としてサレジオの奉仕を行う会においては、ダイナミックな使徒的愛徳は、福音的な慈愛になります。思春期の子ども・青年たちを教育する会では、成長と発展という目標のための受容、参加、導きとなります。さまざまな貧しさに苦しむ人々の世話に献身する会においては、あわれみ深い、支える愛の色合いをもちます。病気の人、高齢の人のために働く使徒職の会では、共感に満ちた愛となります。イエス・マリアの御心修道女会においては、特にハンセン氏病の人々への献身的な愛として表れます。^{へんび}辺鄙な所に点在する遠隔地の村々や、都会のスラムの中に暮らす貧しい人々のための、サレジオの使徒職にたずさわる会においては、自分自身を差し出し共に歩む連帯の愛となります。

第30条 統合の恵み

この使徒的愛徳の源泉を表現するのにサレジオの人々の間で用いられる言葉は、次のものです。統合の恵み、使徒的な内的生活、生活の観想的側面、生き生きとした総合、1つの愛の動きとなる神への愛と青少年への愛、生活の典礼。

*29 RINALDI F., Conferenze e scritti (LDC, Leumann - Torino 1990) p.144

教育することによって福音化し、福音化することによって教育する、という言葉は、サレジオ家族のメンバーの内的統合を表現するものとして今やよく知られています。これは教育の方法について言及するだけでなく、一人ひとりの、また各会の霊性について言及するものだからです。人は聖霊の導きにゆだねるとき、ちょうど、祈りと活動、神への愛と隣人への愛、自分への関心と他者への献身、人間的価値の教育と福音を告げ知らせること、会への所属と教会の一員であることが統合されるのと同じように、生活と使徒職は1つの全体性をもつものになります。すべては統合へと向かいます。それは聖性という、生き生きとした総合です。ここから、聖霊の力によって、活動とあかしのための驚くべき力が生まれます。聖霊は人々をご自分のものとして取られ、みわざのための、自由な、喜びあふれる道具とされます。

使徒的愛徳は、サレジオ家族に所属するすべての人にとり、日常の多様な活動や務めを統合することのできる内的原理、力です。それは使徒的愛徳の切り離すことのできない2つの柱、神への情熱と、隣人への情熱を、1つの内的な動きによって融合させます。

第31条 青少年への優先的な愛と、働く人々・庶民への献身

青少年と社会の働く人々への使命を効果的に遂行するため、ドン・ボスコのすべての弟子は青少年への真の優先的な愛を培い、働く人々・庶民のために献身します。ドン・ボスコの弟子たちは、まさに遣わされる対象である人々を通して神を体験すると確信しています。青少年、社会のふつうの人々、特に貧しい人々です。

少年・少女たちは、サレジオ家族への神の賜物であると認識されます。主は、またマリアは、青少年をドン・ボスコの働く領域として示されました。私たち皆にとり、青少年はサレジオの召命と使命の対象です。

青少年のために献身するということは、心を絶えず青少年に向け、

彼らの望みや願い、問題やニーズを受けとめることです。それはまた、青少年が成長する歩みの中で彼らと出会うことを意味します。それは、ただ共にいるためだけでなく、むしろ彼らが呼ばれているところへ導くためです。そのため、教育者は、青少年が内にもつ善に向かう力を認め、人間として、キリスト者として成長する過程で支え、彼らと共に、彼らのために、可能な教育的な機会を見いだします。情熱に満ちた教育者や福音宣教者の心には、パウロの言葉がいつも響いています。「キリストの愛がわたしたちを虜とりこにしている」(2コリント5・14参照)。

社会のふつうの人々・労働する人々の世界は、私たちが青少年に出会う自然な、日常的な環境です。特に最も助けを必要とする青少年です。ドン・ボスコの家族の献身は、社会のふつうの人々に向けられ、人間的な向上と信仰における成長への人々の努力を支え、自分たちの掲げる人間的・福音的価値を指し示し、促進します。いのち・生きることの意味、よりよい将来の希望、連帯の実践といった価値です。

ドン・ボスコはまた、サレジアニ・コオペラトーリ、扶助者聖マリアの会と共に、大衆的な信心をよく活かしながら、人々の信仰教育の道を開きました。

さらに、ドン・ボスコは、広報の促進に取り組みました。教育と福音宣教という目的のため、可能なかぎり多くの人々にメッセージを届けるためです。

第32条 サレジオ的な慈愛(愛情)

ドン・ボスコの慈愛(愛情)は、疑いようもなく、ドン・ボスコの教育法の特徴です。この教育法は、キリスト教的な環境においても、ほかの宗教に所属する青少年の暮らす環境においても、今日なお、効果的なものと考えられています。

しかしながら、この教育法は単なる教育原理にとどまるものではな

く、私たちの霊性の本質的要素として認識されなければなりません。

実際に、それは本物の愛です。なぜなら神から力を汲むものであるからです。それは単純さ、誠実さ、忠実さのうちに表れる愛、相手と対話したいという望みを生じさせる愛、信じる心と呼び覚ます愛、信頼と深いコミュニケーションへの道を開きます（「教育は心に関わることです」ドン・ボスコ）。周りに向かって広がり、そのようにして家庭的雰囲気を作る愛です。そのとき、共にいることは美しいこと、豊かなこととなります。

教育者にとり、それは強い霊的な歩みの努力を求められる愛です。進んでそこにいてとどまる意志、自己放棄と犠牲、愛情における貞潔と態度の自己抑制、対話に参加することと、最も適切な時、最良の方法を見いだすために待つ忍耐、ゆるし、関係を新たにできること、手放すことを知ると同時に、無限の希望をもって信じ続ける人の柔和への努力です。修徳がなければ真の愛はありえず、祈りにおける神との出会いがなければ、修徳はありえません。

慈愛（愛情）は、牧者の愛の実りです。ドン・ボスコはよく言いました。「相互的な愛情は何に基づいているのでしょうか？ […] イエス・キリストの尊い御血によってあがなわれたあなたがたの靈魂を救いたいという私の願いです。そしてあなたがたは、私が永遠の救いの道を歩むようあなたがたを導こうとするので、私を愛してくれます。したがって、私たちの靈魂の善益が私たちの愛情の礎です。」^{*30}

このようにして、慈愛（愛情）は神の愛のしるしとなり、ドン・ボスコの善良さに触れた心が神の現存に気づくための手段となります。それは、福音宣教の道です。

このことから、サレジオ家族の使徒的霊性の特徴は、漠然とした愛ではなく、相手を愛し、自らも愛される者となることのできる愛であるという確信が生まれます。

*30 ジュゼッペ・ラツツェーロ神父とヴァルドッコの職人見習いの共同体への手紙, 1874年1月20日, Epistolario, vol.IV p.208, フランチェスコ・モット編, LAS Roma 2003

第33条 希望のうちに樂觀と喜びをもって

ナザレのイエスのうちに、神はご自身を「喜びの神」^{*31}として明かされ、福音は人々が神ご自身の幸いにあずかる「真福八端」^{しんぶくはつたん}をもって始まる「良い知らせ」です。この賜物は取るに足りないものではなく、深い意味のあるものです。なぜなら、喜びは、束の間の感傷であるよりもむしろ、人生の困難を前にして抵抗できる内的な力だからです。聖パウロは言います。「わたしは慰めに満たされており、どんな苦しみに遭っても、この上なく喜びに溢れているのです」（2コリント7・4）。この意味で、地上で私たちが体験する喜びは、復活の賜物、永遠において私たちのものとなるあの完全な喜びの前味わいです。

ドン・ボスコは少年たちの幸せになりたいという望みを受けとめ、彼らの生きることの喜びを、快活さ、遊び場、祝いという言葉に換えました。しかし、真の喜びの源は神であると、彼らに指し示すことを決してやめませんでした。『青少年宝鑑』（青少年のための祈りの本）、ドメニコ・サヴィオの伝記、ヴァレンティーノの物語の中の解説など、ドン・ボスコによるいくつかの作品は、ドン・ボスコが明らかにした結びつき、神の恵みと幸福の間にある結びつきを示しています。そしてドン・ボスコが「天国の報い」を強調したことは、地上での喜びが完成され、満ち満ちるといふ展望に目を向けさせるものでした。

サレジオ家族のメンバーは、ドン・ボスコの学び舎で喜びを育み、それを人々にもたらす姿勢を培います。

1. 善の勝利に信頼する。ドン・ボスコは書いています。「最も頑なな少年たちも、心のどこかに柔らかいところがあります。教育者の第1の務めは、その感受性のあるところ、打てば響く少年の心

*31 聖フランシスコ・サレジオ, Lettre à la Présidente Brulart, Annecy, 18 février 1605, Oeuvres, vol.XIII, p.16

の琴線を見つけ出し、それを活かすことです。」^{*32}

2. **人間的価値の評価。**ドン・ボスコの弟子は、この世の良いものを採り入れることができ、同時代を嘆きません。特にそれが若者や人々に好まれるものならば、良いものをすべて受け入れます。
3. **日常の喜びを教える。**創り主が日々、私たちの歩みの途上に与えてくださる数多くの人間的な喜びを知り、あるいは再認識し、単純に喜び味わうために、忍耐強い教育的働きかけが必要です。

ドン・ボスコの弟子たちは、日々、全面的に「喜びの神」に自らをゆだね、「喜びの福音」を言葉と働きによってあかしするので、常に朗らかです。彼らは、聖パウロの勧めに心をとめながら、この喜びを広め、キリスト者の生き方の幸いと、祝いの心を教えることができます。「主においてつねに喜びなさい。重ねて言います。喜びなさい。」(フィリピ4・4)

第34条 仕事と節制

使徒的愛徳の実践には、回心と清めの必要性が伴います。言い換えると、新しい人が生まれ、生き、成長するために、古い人が死ななければなりません。新しい人は、御父の使徒であるイエスにかたどられ、日々、使徒職において自らを犠牲にする心構えをもちます。自らを与えるということは、自分を空しくし、人々に神を与えることができるように、神に満たされることです。離脱、自己放棄、犠牲が本質的な要素になります。苦行を好むためではなく、ただ愛の論理によってです。修徳なしに使徒職はありえず、霊的生活なしに修徳もありません。使命のために全面的に献身する人には、特別な苦行は必要ありません。生活の中の苦勞と使徒職による疲労を信仰のうちに受けとめ、愛をもつ

て捧げるなら、それで十分です。

ドン・ボスコの勧める修徳は、さまざまな側面をもっています。**謙遜の修徳。**神のみ前で自分をただしもべ以外の何者でもないと感じること。**自己抑制の修徳。**自分をコントロールし、感覚や心を守り、安楽の追求によって心の寛大さが失われることのないよう注意すること。**勇気と忍耐の修徳。**困難な現実突き当たったときに堅忍して働き続けることができるように。**自分をゆだねる修徳。**起こる出来事によってキリストの十字架に近づくとき。

第35条 創意工夫と柔軟性

良いことをしたいと望むことは、それを実践する最善の方法を探すことを意味します。ここで重要なのは、ニーズと具体的に可能なことを正しくとらえること、神のみ言葉の光に照らされた霊的識別、率先して取り組む勇気、まだ試していない解決策を見いだす創意工夫、変化する状況への適応、共に働けること、進んで評価を行うこと、などです。

フィリッポ・リナルディ神父はサレジオ会員に次のように言っていますが、これはサレジオ家族の各会に当てはまります。「人類のうちに絶えず生まれてくる善のあらゆる形に適応するこの柔軟性は、私たちの会憲にふさわしい精神です。この精神に反する生き方が導入されるようなことがいつかあるなら、そのとき、私たちの会は終わりを迎えるでしょう」^{*33}。

創意工夫を勧めるドン・ボスコの言葉は数多くあります。「危険な状態にある青少年を救い、靈魂を神に導くのに役立つなら、わたしはあえて無謀なこともする」^{*34}。「私たちの良心がゆるすかぎり、現代の要件、その土地の習慣や伝統に適応しながら、彼らの望みに応えるために最

*33 エジディオ・ヴィガノ、「フィリッポ・リナルディ神父—《サレジオの精神》の真のあかし人、解釈者」最高評議会報332、1989.12.5

*34 ヴェスピニャーニへの手紙、Epistolario CERIA III, p.166-167; BM XIV, p.536

*32 MB V, p.237

大限の努力を尽くしましょう」^{*35}。

それは、ただ方策の問題にとどまらず、靈的な事柄です。なぜなら、聖靈に従順に、また時のしるしの光に照らされ、自分たち自身と自分たちの働きを絶えず刷新することを意味するからです。

20世紀になって誕生してきたサレジオ家族の数々の会は、ドン・ボスコの忠実な創意豊かな息子であるそれぞれの創立者たちの、創意工夫と柔軟性の実りでした。

第36条 サレジオの祈りの精神

サレジオの祈りは使徒的な祈りです。それは、神へと至るために活動から出発する動きであり、思いと心は神の愛に満たされるので、神から、神と共に、活動へと戻る動きです。

ドン・ボスコは祈りに長時間をかけませんでした。また特定の方法や形は用いませんでした（ドン・ボスコにとり、「良いキリスト者としての信心」で十分でした）。ドン・ボスコにおいて、活動と祈りは全く1つだったからです。朝から晩まで取り組んでいた尋常でないほどの仕事はドン・ボスコの祈りの妨げにはならず、むしろ祈りを生じさせ、導きました。そしてドン・ボスコの心の奥底で培われた祈りは彼を養い、愛徳の力を彼のうちに新たにし、貧しい少年たちの益のため、もてるすべてをかけて献身させました。

オラトリオという、ドン・ボスコの最初の施設に与えられた名前そのものが、その場所のすべてが祈りである、あるいは祈りになりうるということ、その家で行われる良いことはすべて、祈りの実りであることを伝えるために付けられました。その祈りとは、ドン・ボスコの祈り、協働者、少年たちの祈りです。

*35 MB XIII, p.210

このように行き渡る祈りの雰囲気は、ドン・ボスコの靈性を生き、その使命を遂行する人々にとり、典型的なものです。しかし、時間を取って祈る祈りの時をおろそかにするわけではありません。祈りの時は、神のみ言葉に聞き、愛をもって応えることによって養われます。こうして、生活は祈りとなり、祈りは生活となります。

第37条 扶助者聖マリア：使徒的靈性の師

マリアへの信心は、ドン・ボスコの靈的・使徒的生き方を特徴づけた3つの信心のうちの1つでした（聖体に現存されるイエス、そして教皇への信心と共に）。全サレジオ家族は、無原罪の扶助者の母としての配慮によって誕生したマリアの家族として、自らをとらえています。実際、すべての会が、この確信を会憲に表明しています。

サレジオ会にとり、扶助者聖マリアは、教育的・使徒的活動における模範、導き手^{*36}、養成体験における母、教師であり^{*37}、祈りのときに特別に呼び求める方です^{*38}。

扶助者聖母会（サレジアン・シスターズ）にとり、おとめなる母マリア、謙遜なはしため、救い主の母は、すべてのサレジオの召命の母、師であり、「真の長上」です^{*39}。マリアは信仰、希望、愛の模範、神との一致、母としての心遣いと優しさ、奉獻生活、祈り、ゆだねる心、聞く姿勢、温順さ、協働、使徒的愛徳の模範です^{*40}。

サレジアニ・コオペラトリーは、「無原罪の扶助者聖マリアの中に自らの召命の最も深い要素を見いだす。それは、神の救いの計画の実現における真の『神の協力者』となることである。」^{*41}

*36 サレジオ会 会憲 20、34、92条参照

*37 同 98条

*38 同 84、87、92条

*39 FMA 会憲 17、18、44、79、114 参照

*40 同 4、7、11、14、37、39、44、79、71 参照

*41 使徒的生活のプロジェクト第20条

ADMAのメンバーにとり、マリアにゆだねるということは次のことを意味します。「福音的姿勢をもって日々の霊性を生きる。特に、絶えず行われている神のみわざに感謝し、困難や十字架の時にも、マリアの模範に従い、神に忠実であることによって。」^{*42}

イエスのカリタス会にとっては、聖霊の勧めに従順して生き、イエス・キリストを生活の中心にすえ、人々との関わりの中で、マリアへの心からの愛と大いなる信頼を養い、日々の生活の中で神のみ旨を探す信仰者の模範に倣うため、隣人に気を配る愛情深い母、神のみ言葉を聴く御子の弟子、苦しむものなぐさめ、キリスト信者の扶助者であり人類の母なる方の模範に倣うために、マリアは助けてくださいます^{*43}。

Damas Salesianas（サレジオ婦人会）は、Ideario 会則に次のように記されています。「マリアは、信徒の女性として献身した最初の人であり、忠実な自己贈与のうちに神のご計画を受け入れ、み言葉を生けるものとし、女性、伴侶、母、教え手、あかし人として、最初に福音化され、そして福音を告げる者となった。マリアは、Damas Salesianasのメンバーのインスピレーション、倣うべき模範である。以上のことから、私たちはマリアを、最初の Dama Salesiana、手本、導き、インスピレーション、母、姉妹、使命における忠実な同伴者と宣言します。」^{*44}

したがって、日々、マリアに信頼してゆだねることは、私たちの霊性の特徴です。ゆだねることに、上向きの働きがあります。それは、果たされるべき使命に惜しみなく応えるために、自分を捧げることです。しかし、下降の動きもあります。ドン・ボスコを導いた方、今もひきつづきドン・ボスコに起源をもつ霊的家族を導かれる方の助けを、信頼と感謝のうちに受けることです。

*42 ADMA 改訂版会則、第4条

*43 イエスのカリタス会 会憲 第12条 参照

*44 Ideario Damas Salesianas 第14条

第4章

サレジオ家族における交わりと使命のための養成

サレジオ家族の各会は、共通に受け継いでいるものと、それぞれの固有の特質から汲みながら、それぞれのメンバーの養成を担います。しかしながら、共通の要素、一致点を見いだす可能性、期待される協力の形を特定することができます。

第38条 固有のアイデンティティの認識

サレジオ家族の交わりは、共有するカリスマと同じ使命、そして、家族を構成するさまざまな会について知り、評価することに基づいています。実際、一致は決して画一的になることを意味するのではなく、1つの中心に収斂する表現の多様性を言います。

したがって、各会の賜物や固有の特質を享受するために、互いについての知識を促進する必要があります。各会の賜物や特質は、皆の益となる宝です。

そのために役立つのは、折々にあるいは定期的に、非公式・公式の会合、交流会や共同の祈りの時をもつことです。

「カリスマ的・霊的アイデンティティ憲章」、ドン・ボスコに関する文献、創立者・共創立者の伝記、サレジオ会総長の毎年のストレナ、各会の計画、「ボレッティーノ・サレジアーノ（ドン・ボスコの風）」、特に重要な使徒的体験などを配布し広めることは、相互理解と尊敬に貢献し、同時に家族の一致を強めるでしょう。

ドン・ボスコによって創立された会、また、それぞれの地域に存在し働いている会に、特別に配慮する必要があります。

第39条 共同の養成

精神の一致と使命のための一致を確かなものとするため、共同の養成の時をもつことも必要です。特に、カリスマの本質的側面に光を投げかける、あるいはそれを深く考察するため、また、共同のプロジェクトを計画するためである場合です。これらのことは、常に各会の正当な自立性を尊重しつつ、しかしまた、一致を表し強める家庭的精神を大切にしながら実施することができます。

共に養成されるため、何よりも、共に考えるようになることが必要です。相手を自分のものの見方のほうへ誘導する危険が常にあるからです。本当の議論と話し合いへの恐れに打ち勝ち、自らに集中するのではなく、それぞれが他者に心を向けるとき、自己肯定のためではなく、それ自体が良いものであると見なされるものを目的とするとき、真理と愛徳が1つになるときに、共に考えることは可能になります。

さらに、共同の考察と建設的対話のために、方法や手段を特定しながら、共に働くようになることが必要です。

いつでも、どこでも、共に祈ることが必要です。なぜなら、すべての良いもの、義とされる正しいことを、一人ひとりのため、また全体のために教え示してくださるのは、真理の光、一致の源である聖霊だからです。

共同の養成の機会は数多くあります。

- ・ カリスマ的体験のさまざまな側面についての勉強会。共有するものでありながら多様な、私たちの固有の霊性、ドン・ボスコから受け継いだ遺産、時のしるしが指し示す挑戦、教会の主要な出来事あるいは教皇と司教会議の教導職による重要な指針などについてです。
- ・ 青少年司牧の課題や問題、サレジオの教育法にまつわるさまざまなテーマ、新たな福音宣教を視野に入れた宣教の方法、などについての話し合い。

- ・ 特別に困難な状況における、あるいは共に取り組む養成プログラムや使徒的プロジェクトに関わる、識別の歩みへの参加。

この面で特に重要なのは、サレジオ家族の諮問委員会であり、すべての会の参加と支えを必要とします。

第40条 多様な働く場

使命のためには、緊急なニーズをとらえ、良いことのために働くすべての人と協力できることを示しながら、多様な文化的・社会的・教会的環境の中に入ることを求められます。

そのために、偏見をもたずに、聞く姿勢を養い、疑いの目で見るとは受容の態度を示し、嫉妬することなく評価し、傍観するのではなく参加する態度を身につけるように、自らを訓練する必要があります。

このようにするとき、教会の交わりが築き上げられる中で、信仰とカリスマのインカルチュレーション（文化受容）に貢献することができます。教会の交わりは常に、特定の会、あるいはサレジオ家族そのものよりも、常に幅広いものです。

この養成は、各会・運動・グループの会合という具体的状況において行われます。各会・運動・グループは教会の豊かさを表し、神の国に奉仕します。

その中で第1にあげられるのは、大きな広がりをもつサレジオ運動です。ドン・ボスコの霊的家族はその活性化の中核を形成しています。

養成に適した場としてはほかに、地方教会でサレジオ家族の会があるところ、そして同じ地域で働くほかの教会グループとの協力があるところです。さまざまな教会運動に与えられる神の恵みの多様な姿は、固有の霊性や独自の使徒的あり方に表れ、それらは知られ、受け入れられるべきものですが、一方、私たちは自分たちのカリスマにおける

アイデンティティーと固有の使命を通しての支援を、皆に差し出します。

それは、互いへの尊敬を教える養成、愛徳と、進んで協力すること、忍耐と長期的視野をもって行動すること、時には求められる犠牲を受け入れる心構えにおいて、惜しめない広い心をもつことを学ぶ養成です。

ドン・ボスコはすべての人に受容と感謝の思いと言葉をかけ、洞察や体験、成果を皆と分かち合うことができました。私たちはこのドン・ボスコの模範に勇気づけられるサレジオ家族として、受けた賜物を強め、全教会と分かち合うように呼ばれています。

第41条 協働の方法論

共に働くということは、自然に実現するわけではありません。いくつかの本質的要素を考慮する養成が必要です。

1. 何よりも、共に計画することについて学ばなければなりません。すべての教育的、使徒的な活動は、対象者の状況の分析から出発し、特定の具体的な、短期・中期・長期的目標の達成を目指すものでなければなりません。利用できる技能を活かし、多様なものの見方を尊重し、一致点を見いだすことを促進しながら、そのすべてを共に考察、計画する必要があります。
2. 連携調整の方策を共に考える必要があります。1つの事業のためのさまざまなグループの連携は、放っておいては決して実現しません。実際、いくつかの能力が求められます。解決しようとする問題について正確な知識をもつこと、実施の目的を明確にすること、行動のための可能性を現実的に斟酌^{しんしゃく}すること、与えられている人材や手段の評価を行うこと、自分が提供でき、提供するつもりである支援についてありのまま伝えることなどです。
3. また、相互関係論理的結果を受け入れる必要があります。与え、そして受けることは、決して一方通行ではありません。互い

の価値を受け入れ合うということは、自分に与えられている賜物とほかの人たちに与えられている賜物を意識すること、自分の価値とほかの人たちの価値を認めること、補い合う感性、アイディア、技能を受け入れ、交換し合うこと、惜しみなく謙虚に自らの貢献を果たすことです。

4. 最後に、責任を共に担うことを学ぶ必要があります。教育的・使徒的分野での協働がうまくいくかどうかは、プロジェクトを運営する主要な責任者を受け入れること、そしてほかの人々の責任を認めることにかかっています。共同の計画を実施するために皆が積極的に参加できるよう、すべての人に働くスペースを与えながら。

第42条 サレジオ家族の中の司祭の役割

第2バチカン公会議は、司祭を神の民の導き手、教育者として示し、次のように述べています。「美しい儀式も盛んな会も、キリスト者としての円熟に達するよう人々を教育するものでなければ、たいして有益ではない。」^{*45}

そして、そのように述べる理由を示しています。「司祭たちは信仰における教師として、自分自身または他の人を通じて、信者が聖霊において、福音に基づく自分の召命の開花、誠実で実行的な愛、キリストがわれわれに与えた自由に到達するよう配慮しなければならない。」^{*46}

このように、サレジオ会司祭は、養成の分野で自らの最も重要な責任に召されています。神のみ言葉、秘跡、特に聖体の秘跡、一致と愛への奉仕は、教会の最高の宝です。

公会議の言葉を借りると、次のように言えるでしょう。サレジオ家

*45 司祭の役務と生活に関する教令6

*46 同

族のような使徒的家族を霊的に形作ることは、その礎、中心として聖体の祭儀がなければ不可能です。家族の精神を作り上げるためのあらゆる教育が、聖体から生まれなければなりません^{*47}。

サレジオ家族の各会は、この養成のための要件を常に示してきたものであり、本書においてこれを再び強調します。

第5章 サレジオ家族の構成、活性化

第43条 成長する家族

サレジオ家族は、過去数十年の間、真の春を体験してきました。聖霊の促しのもと、新たな会が最初からあった会に加わり、交わりは豊かにされ、サレジオの使命は広がりました。

家族の成長と、使徒的活動が世界のさまざまな国で数多く増えたことは、誰の目にも明らかで、活動分野が広がったことは多くの青少年や大人の益となっています。このことから、私たちは神に感謝するよう招かれるだけでなく、私たちの責任が大きくなっていることを認識させられます。実際、私たち家族の召命は、ほかのあらゆる召命と同じように、使命に奉仕するもの、特に青少年の救い、中最も貧しく、見捨てられ、危険にさらされた青少年の救いに奉仕するものです^{*48}。

正式にサレジオ家族として認められている会は次のとおりです。

1. 聖フランシスコ・サレジオ修道会
2. 扶助者聖母会（サレジアン・シスターズ FMA）
3. サレジアニ・コオペラトリー（サレジオ協力者会）
4. 扶助者聖マリアの会（ADMA）
5. ドン・ボスコ同窓生会
6. 扶助者聖母同窓生会
7. VDB（ドン・ボスコ女子在俗会 Volontarie di Don Bosco）
8. イエス・マリアの御心修道女会

*48 バスクアーレ・チャーベス、2009年ストレンナ解説「サレジオ家族の昨日、そして今日：種は木に、そして木は森になった」参照

*47 同参照

9. サレジオ御心奉獻者会
10. 聖家族の使徒会
11. イエスのカリタス修道女会
12. 扶助者聖マリア宣教姉妹会
13. 神なる救い主修道女会
14. 汚れなきマリアの御心侍女会
15. 少年イエスの姉妹会
16. Damas Salesianas (サレジオ婦人会)
17. ドン・ボスコ男子在俗会 (CDB)
18. 無原罪の扶助者聖マリアのカテキスタ姉妹会
19. 元后無原罪の聖マリア修道女会
20. 復活の主のあかし人 TR2000
21. 大天使聖ミカエル修道会
22. 御復活姉妹会
23. 主の宣教姉妹会
24. 主の弟子の会 - 在俗会
25. “Canção Nova (新しい歌)” 友の会
26. 大天使聖ミカエル修道女会 (ミカエリート)
27. 扶助者聖マリア姉妹会
28. ドン・ボスコの使命共同体 (CMB)
29. 元后無原罪の聖マリア会
30. ドン・ボスコ聖母訪問会 (VSDB)

第44条 開かれた家族

青少年の救いのための幅広い運動という特質をもち、宣教地で、働く人々の中で、広報や、召命のための働きにおいて、使徒職の多様な形のうちに自らを表すサレジオ家族は、総長による公認を求めるほか

の会にも開かれています。

サレジオ家族として認められるために不可欠な規準は次のものです。

1. 「サレジオの召命」に参加していること。言い換えれば、ドン・ボスコの人間的・カリスマ的体験を十分に共有していることです。実際、ドン・ボスコはすべての会にとり、弟子としての、また使徒職のための固有の道の、起源となるインスピレーションです。すなわち、ドン・ボスコはインスピレーションの源、一致の拠りどころです。
2. 青少年や社会のふつうの人々のためのサレジオの使命に参加していること。すなわち、各会はその固有の目的の中に、表現においては形や強調点がさまざまに異なるとしても、サレジオの使命の典型的要素を含むということです。
3. 精神、教育法、宣教のスタイルを共有していること。言い換えれば、ドン・ボスコの霊的・教育的遺産を共有しているということです。
4. サレジオの精神に則した福音的生活。すなわち、聖性への道として福音的勧告からインスピレーションを受けた生き方です。それは、修道奉獻の誓願によって、あるいは各会にそれぞれの特質を与えるさまざまな形の約束、あるいは誓約によって具体的に表されます。
5. 積極的な兄弟愛。サレジオ家族の中のほかの会と、調和と協同のうちに連携し、働くことへと各会を導くものです。

第45条 拠りどころとなる中心

カリスマ的性格をもつ使徒職の交わりによって、サレジオ家族を構成する各会は、ドン・ボスコの後継者であるサレジオ会総長のうちに、父、家族そのものの一致の中心を認めます。

そのため、ドン・ボスコのカリスマの豊かさの特別な継承者である

サレジオ修道会は、サレジオ家族全体を活性化する責任を担っています。実際、サレジオ会は、特別な「責任を負っている。それは、相手も自分も豊かにし、より効果的に使徒職を行うため、同じ精神を保ち、対話と兄弟的な協力を促進する責任である」^{*49}。したがって、サレジオ会は、統治の権威によってではなく、謙遜な喜びに満ちた献身による奉仕を遂行します。受けた賜物への忠実の道を促進し、その伝達、共有、実現を育むためです。

第46条 活性化を行う組織と会合の機会

サレジオ家族の持続的、効果的な活性化を確かなものとするために、なくてはならない調整を行う組織があり、会合の機会をもつことが奨励されます。

世界、地域、国、管区、支部の各レベルで、一致と活性化はサレジオ家族の評議会あるいは諮問委員会によって支えられ、強化されます。

さまざまなレベルでの諮問委員会の会合は、次の目的の達成を目指します。

1. ドン・ボスコとその生涯、教育、霊性をより深く研究、考察すること。ドン・ボスコの使徒的計画と司牧活動のための規範を、よりよく知り、理解し、取り入れることができるようになるためです。
2. 帰属意識を強め、家族の中のさまざまな会についての直接的、具体的な知識と、それぞれの固有のアイデンティティへの評価を育む。
3. 会合や共同の養成プログラムを企画する。
4. 社会が、またサレジオ家族がその一員である地方教会が前にしている司牧上の挑戦を知り、各会の固有の特質に従い、サレジオの

使命における交わりのうちに、司牧のための協同の働きの可能なあり方を検討する。

5. 同じ地域のすべての会が共有する具体的な使徒的取り組みを、できるだけ頻繁に実施に移すように努める。

世界諮問委員会は毎年、サレジオ会総本部で会合をもち、来たる司牧年度のために、活性化の基本的な指針を提示します。

各地域あるいは管区で、毎年、**サレジオ家族の日**が祝われます。これを養成と体験の分かち合いの機会とすることが勧められます。

世界レベルでは、毎年、**サレジオ家族霊性週間**が開催されます。霊性週間は、交わりと振り返り、分かち合いの時となります。特に、「総長のストレンナ」の内容について深める機会となります。この文書は、共に考察を行い、サレジオの霊性と使命の特定の側面を具体的に実践に移すための招きとして、毎年、ドン・ボスコの後継者によって提示されます。

*49 サレジオ会 会憲第5条③

第47条 祈り

若者の父、師である聖ヨハネ・ボスコよ
あなたは聖霊の賜物に素直に従い
「小さな者、貧しい者」への
優先的な愛という宝を
サレジオ家族に残してくださいました。

私たちの心に
良き牧者キリストと同じ思いを培い、日々、この小さな人々のため
神の愛のしるしと担い手になれるよう
私たちに教えてください。

いつくしみに満ちた心
仕事における忍耐、知恵ある識別、
教会の教えをあかしする勇氣、
宣教のための開かれた心を
サレジオ家族一人ひとりのために
主に取りなしてください。

主が私たちと結んだ特別な契約に
忠実に応える恵みが与えられよう
私たちを助けてください。

私たちが扶助者聖マリアに導かれ
神の愛に至る道を
喜びをもって、若者と共に
歩むことができますように。
アーメン。

ドン・ボスコのサレジオ^{かぞく}家族 アイデンティティ^{けんしょう}憲章
CARTA D'IDENTITÀ CARISMATICA
della Famiglia Salesiana

2012年9月21日 初版発行

訳者 佐倉 泉

発行者 サレジオ修道会

発行所 ドン・ボスコ社

〒160-0004 東京都新宿区四谷1-9-7

TEL 03-3351-7041 FAX 03-3351-5430
